3日間－The Dead Line－

にっくん♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
３日間－Ｔｈｅ　Ｄｅａｄ　Ｌｉｎｅ－

【Ｎコード】
Ｎ１２７４Ｈ

【作者名】
にっくん♪

【あらすじ】
人口わずか２５人の小さな村、長野県西羽生村。そこで暮らす中学３年生・野沢良輔。平凡な毎日をこれからも過ごせるはずだった良輔の身の周りで、起きる連続殺人事件。その裏側に隠された、事件の真相とは――。小さな村を巡る、３日間の出来事を描いた物語。

プロローグ　いつもの朝

目覚まし時計が響く。
「良輔～！」
「うーん……」
「良輔！　いつまで寝てるの！？　いい加減、起きなさい！　遅刻するでしょ！？」
「うぇ～いっす……」
長野県　西羽生村。全人口２５人というこの村に住む中学3年生・野沢　良輔は眠い目を擦りながら起きた。
「おはよ……」
「おはよじゃないわ！」
母の摂子がプリプリしながら目玉焼きを焼いている。
「お兄ちゃん遅い～」
妹の美菜がヨーグルトを頬につけながら笑う。
「お兄ちゃんは低血圧なの～」
そう言って良輔は美菜の頬についたヨーグルトを取ってあげた。妹想いの良輔だからこそ、寝ぼけていてもできることだ。
「怖い顔して何読んでんの、父さん」
父の幹夫が朝刊を珍しく読んでいる。
「あなた。食事中はよしてちょうだい」
「あぁ……スマンスマン」
バサッと音を立てて新聞がソファに放り投げられた。その一面に、なにやら事故か事件があったのか、大きな写真とデカデカとした字が書かれていた。
（なんだろ……）
良輔は少し気になったが、摂子が「早く顔洗って歯磨きしておいで！」と言うので良輔は慌てて洗面所へ駆け込んだ。
結局、良輔はその後制服に着替えたり荷物の準備をしたりとバタ

バタしてしまい、ニュースも新聞も見れないまま、登校する時間になった。
「お兄ちゃ～ん！　はーやーくー！」
美菜が急かす。
「わかったわかった！　じゃ、行ってきます！」
「車に気をつけてね～！」
「この田舎じゃ車なんて滅多に走らないって。じゃー！」
そう言うと美菜と良輔は手を繋いで走り出した。
鮮やかな朝日が降り注ぐ。
何の変哲もない一日が始まる――はずだった。

主な登場人物

※ネタバレ注意！※

7月1日　19時30分現在

＜主要人物＞

☆野沢（のざわ）　良輔（りょうすけ）　［15］

長野県　西羽生村の羽生中学校に通う中学3年生。活発な少年で、勉強はあまり好きでない体育会系。部活は羽生中学校には陸上部か手芸部しかないため、必然的に良輔は陸上部に在籍している。

◆姫路（ひめじ）　美咲（みさき）　［15］

良輔の幼なじみ。おしとやかで誰に対しても親切、滅多に怒らない。時たま吐く毒舌で良輔や雄哉をどん底まで突き落とすことがあるのだが、彼女にその自覚はない。

☆浦上（うらがみ）　雄哉（ゆうや）　［15］

良輔の幼なじみ。村の中では子供たちを取りまとめるいわばガキ大将的な存在。ただ威張り散らすだけではなく、成績もよく運動神経もそこそこなので、良輔も多大な信頼を寄せている。

＜野沢家＞

☆野沢（のざわ）　幹夫（みきお）　［45］

良輔の父。村で唯一の交番へ勤務する。

◆野沢（のざわ）　摂子（せつこ）　［42］

良輔の母。

◆野沢（のざわ）　美菜（みな）　［7］

良輔の妹。小学1年生で、羽生中学校内にある分校へ通う。

＜姫路家＞

☆姫路（ひめじ）　龍彦（たつひこ）　［46］

美咲の父。村で唯一の銀行の出張所へ勤務する。

◆姫路（ひめじ）　靖代（やすよ）　［44］

美咲の母。村のハズレにある食料品店でパートをしている。

＜浦上家＞

☆浦上（うらがみ）　誠（まこと）　［43］

雄哉の父。村のハズレで食料品店「うらがみ」を経営している。

◆浦上（うらがみ）　松子（まつこ）　［42］

雄哉の母。小学校と中学校での給食を作る調理師。

＜村民＞

（男性）

☆十河（そごう）　平祐（へいすけ）　［25］

村内にある消防署分署へ勤務する消防士。

☆橋詰（はしづめ）　敬二（けいじ）　［５６］

西羽生村　村長。

☆板倉（いたくら）　聡明（としあき）　［３２］

羽生中学校および分校小学校の教師。良輔たちの担任。

☆川村（かわむら）　新吾（しんご）［２６］

村で唯一の病院・川村医院の医師。

☆？？　？？

☆？？　？？

☆？？　？？

☆？？　？？

（女性）

◆東田（ひがしだ）　みその　［４６］

村役場職員。独身の自称キャリアウーマン。

◆遠藤（えんどう）　志甫（しほ）　［２８］

環境省認定のフォレスト・レンジャーと呼ばれる職に就いている女

性。

◆池田（いけだ）　愛佳（あいか）［２４］

川村医院の看護師。

◆？？　？？

◆？？　？？

◆？？　？？

7／1　08：10

「ふあ～ぁ……」
良輔が大きなアクビをすると、美菜が心配そうに声をかける。
「眠たいの？」
「ちょっとね～……」
「お勉強、頑張ったの？」
「そういうことにしとこうかな！」
良輔は美菜の頭をクシャクシャと撫でた。美菜は良輔に撫でてもらうのが大好きだ。
「よぉく言うよ。どうせエロ本かエロビでも見てたんじゃねぇの？」
「その声は……雄哉だな？」
「当たり！　おはようさん、良輔」
そう言って木陰から現れたのは、幼なじみの浦上（うらがみ）　雄哉（ゆうや）。村の子供たち（といっても、良輔、雄哉、美菜のほかに3人いるだけだが）を取りまとめる、よく言えばリーダー、ちょっと庶民派（？）な言い方をするとガキ大将のような存在だ。
だからといって某アニメのように威張り散らすだけでなく、運動神経はそれなりによく何より頭の回転が速い。成績も上々なので、良輔も頼りにする面が大きい。
「誰がエロ本なんか読むかよ」
「おやおや～？　お年頃なんだから、読んでたりしててもおかしくないですよね？」
「そういう雄ちゃんはどうなのよ」
「おっ、美咲じゃーん。おっはよ！」
良輔と雄哉の間に割って入るように現れたのは姫路（ひめじ）　美咲（みさき）。彼女もこの西羽生村の数少ない子供の一人で、子供たちの中でもほわわんとした平和キャラが魅力的だ。ただ、時たま吐く毒舌が恐ろしく、良輔や雄哉をどん底へ叩き落すことも稀にある。

「それはそうと、国語の宿題やってきた？」
「え！？」
美咲の言葉に良輔と雄哉は顔を強ばらせた。
「あーぁ……忘れちゃったんだ」
美咲が哀れむような表情になる。
「だ、大丈夫だよ！　学校着いてからソッコーでやれば……」
「それがそういうわけにもいかないみたい」
「なんで？　チャチャっとやっちゃえば済むようなヤツだったから」
「後ろ見てみれば？」
「後ろぉ？」
後ろを振り返ると、良輔たちの担任である板倉（いたくら）　聡明（としあき）が立っていた。
「まったく～……お前たちは！　いっつも何か粗相を起こすなぁ」
良輔と雄哉の顔が青ざめる。
「さぁて……今日はどんな罰ゲームを喰らわせてあげようか？」
「や、やっだなぁ先生！　もう三十路なんだからさぁ、そんな大人気ないことやめようよ？」
雄哉が冗談交じりで言ったが、単にそれは聡明の怒りを増すだけであった。

「ったく。雄哉が変なこと言うから1時間目まるまる掃除させられるハメになっちまったよ」
良輔はブゥブゥ不満を言いながらほうきでゴミを掃いていた。とはいえ、ここは自然豊かな村。ゴミというよりは砂と落ち葉くらいしかないわけで、しかも夏場のこの時期だから落ち葉なんてほとんどないのである。
「いいじゃん！　授業よりこうして外で掃除してるほうが楽で」
「まぁな」
すると、茂みのほうでガサガサと音がする。
「おいおい、またいるんじゃねぇの？」

「またか……」
良輔と雄哉はため息をついた。
「よし！　今日は雄哉の番だぞ？」
「バカ言え。先週は俺がやったんだから、今週はお前！」
「しょうがないなぁ、肝の小さいヤツは」
「んだと～？　いいからサッサと行け！」
良輔は仕方なく、茂みのほうへ行ってほうきを突っ込み、軽くつついた。
「んも～！　せっかくいい所なのに……またあなたたち！？」
そう言って茂みから姿を現したのは、遠藤（えんどう）　志甫（しほ）。彼女は環境省認定のフォレスト・レンジャーと呼ばれる職に就いている。西羽生村の特徴的な自然に惹かれて、自ら立候補してこのド田舎にやって来た、少々変わり者の女性である。その様子は、この学校内という場所にある茂みにもぐっているあたりからも窺（うかが）えるであろう。
「それはこっちのセリフ！　志甫さん、ここ学校でしかも授業中」
「いいじゃないの！　この学校にある植物は興味深いのが多いのよ。今後の研究の資料になりそうなものが……」
ブツブツと言いながら志甫は再び自分の世界に入ってしまった。こうなると、誰もツッコミの仕様がなくなってしまう。
「しょうがない。この人は放置してそろそろ教室戻ろうぜ」
良輔がため息を漏らして、ほうきとちりとりを手にして歩き出した。
「そうだな」
雄哉も納得して歩き出す。志甫は相変わらずブツブツと何か葉っぱを片手に呟いていた。
「それじゃ、今日はここまで。はい、姫路。号令！」
聡明の呼びかけに応じて、委員長の美咲が声をかける。
「起立」
そう言って数少ない生徒たちが立ち上がる。雄哉、美咲、美菜、

良輔。そして残りの二人は男女一人ずつ。男子が小学校４年生の濱（はま）大地（だいち）。女子が中学1年生の塚本（つかもと）　美々（みみ）。まだまだ幼い彼らは、良輔たちを兄や姉のように慕ってくれる、とてもいい子たちだ。

鐘というのが相応しいチャイムの音が鳴る。これも放送ではなく、村役場職員である東田（ひがしだ）　みそのという女性が鳴らすのである。この羽生中学校および分校小学校には校長先生がおらず、聡明と村役場の職員、そして給食を作る雄哉の母である浦上（うらがみ）　松子（まつこ）のみで職員は構成されている。

「ようし！　今から校庭で鬼ごっこだ！」

そう提案したのは良輔。

「えぇ？　鬼ごっことはまた疲れることを……」

美咲がため息を漏らした。雄哉が「オバハン臭いこと言ってんなよ、美咲ぃ」と茶化すと「ヒドいよ～。見た目でいけば雄哉くんのほうがオッサンだよ？　だって、髭生えてるし」と奈落の底へ突き落とすような毒舌によって、雄哉は床にガックリと座り込んでしまった。

「はいはい。それじゃあどん底の雄哉くんに元気出してもらうために、鬼ごっこに決定！」

「お前ら～……待ちやがれー！」

キャアキャアと美菜や大地が嬉しそうに駆け回る。校舎から校庭へ飛び出し、グルグルと満遍なくあちこちを駆け回る６人。いつのまにか良輔は、校舎裏の茂みにやって来た。

「そういえば……」

良輔は志甫の姿を探した。まだいるんじゃないかと思ったのだが、どうやらさすがに帰ってしまったらしい。まだいたらいたで、病気のような感じもするのでいないとわかってちょっとホッとしたのが正直な気持ちであった。

「ここならバレにくいだろ……」

良輔はそう言って茂みに隠れようとした。

グニッ――。

「――え？」

嫌な感触がした。まるでそれは犬の置き土産を踏むような感触。

「最低だぁ……。ったく、どこのワンコだよ……」

しかし、次の瞬間良輔の目に映ったのは、肌色の細い、５本の何か――紛れもなく、指だった。そして、その先に伸びるのはちょっと日焼けをした、これもまた細い腕。

視線を先へ移す。すると、今度こそ映った。首を絞められ、目を限界まで見開いているその人物は、遠藤　志甫であった。

「うあああああああああああああああ～っ！」

良輔の悲鳴が、村中に響いた。

＜残り２４人＞

7／1　15：45

「大丈夫……？」
美咲が心配そうに良輔に声を掛けた。
「……。」
良輔は体をブルブルと震わせるだけで、何も答えることができない。当然だろう。人の死体を目撃しただけでなく、それを「踏んで」しまったのだから。
「飲めるか？」
雄哉が買ってきたばかりのミネラルウォーターをカバンから取り出した。良輔は首を横にフルフルと振るだけで、言葉をやはり返してこない。
「本当に……志甫さんだったの？」
良輔が小さくうなずく。あれを間違えるはずがなかった。
「なんで……こ」
雄哉が一瞬詰まったが、ハッキリと口にした。
「殺されたんだ？」
それは誰もが思うことであった。
この長野県西羽生村は全人口２５人の小さな村だ。長野県の中でも駒ケ岳（こまたけ）の麓に位置するかなりの山間部で、この西羽生村へ来ようと思ったらＪＲ飯田線の駒ヶ根駅から県道７５号線を車で移動。さらにそこから箱根駒ケ岳ロープウェイを利用してしばらく登山道を使わなければ来られない場所である。
これといった観光名所もないため、宿泊施設なども用意されていない。そのため、外部の者が入村する可能性というのは極めて低いものがあった。何しろ、宅配便ですら１週間に一度しか来ないという有様である。
遠藤　志甫はそんな村に環境省から派遣されたフォレスト・レンジャーであった。何をするのか良輔も具体的に知っているわけでは

ないが、どうやら森林の保護や研究を行っていそうだった。彼女は村の出身ではないが、大学卒業後からこの村に定住している。今年でもう6年目と言う立派な村人であった。
ちょっと不可思議な面はあったものの、恨みを買うような人間でないのは良輔をはじめとする村人全員が知っていた。そんな彼女がなぜ、殺されたのか――。
「良輔」
良輔の父である野沢（のざわ）幹夫（みきお）が良輔を呼んだ。幹夫は村で唯一の交番に勤務する、頼れる警察官だ。
「父さん……」
「詳しく話を聞かせてくれるか？」
「……わかった」
良輔はおぼつかない足取りで立ち上がり、幹夫の後を追った。
「事情聴取……かな」
美々が不安そうに呟いた。
「だと思う」
雄哉が返した。
「怖い……」
美菜がギュッと美咲の腕をつかんだ。
「大丈夫よ。今日はみんなで帰ろうね？」
美咲も不安で仕方がなかったが、みんなと一緒なら大丈夫という安心感があった。
「行こうか」
雄哉が全員に声をかける。
「良くんの荷物は？」
「俺が持って帰るよ。美菜ちゃんも送っていくし」
「そのほうがいいね」
「美咲。お前は大丈夫なのか？」
「大丈夫。いざとなれば、大地くんいるし」
大地が恥ずかしそうに笑った。大地は小柄だが、既に柔道は黒帯

である。
「そうだな。大地、頼んだぞ？」
「うん！」
大地の屈託ない笑みが、雄哉には少し儚げに見えた。

１５時１５分。良輔は自宅からそれほど遠くない交番に父と一緒にやって来た。
「そうか……。鬼ごっこを放課後にしてたんだな」
「うん……。２時に授業が終わって……今日は先生が出張の日だから、早めに授業を切り上げたんだ」
「志甫さんを最後に見たのは？」
「一時間目……。多分、９時半過ぎだと思う」
「その後、志甫さんを見た人は？」
「大地が……昼飯のときに弁当箱ひっくり返して、アイツ服にソースが飛んだから雄哉と一緒に洗いに行ったんだ」
幹夫は真剣な表情で良輔の言葉をノートに記していく。
「それで、その時志甫さんの様子は？」
「いつもどおり草を取ったり、花を摘んだりして研究熱心だったって言ってた」
「なるほど……その後はどうだ？」
「午後１時半過ぎに、美菜がトイレ行きたいっていうから美咲がトイレに連れて行ってくれたんだ」
「そのときは？」
「帰ってきたときに美咲が『志甫さんまだやってる』って言ってたし、美菜も『お花いっぱい摘んでた』って言ってたから……生きてたと思う」
「なるほど……」
良輔の震えが止まらない。幹夫は警察官ではなく、良輔の父の姿に戻った。
「大丈夫か？」

「……すっげぇ、怖かった」
「大丈夫なハズないよな。怖かったな……」
しばらく良輔をしっかりと抱き締めてくれる幹夫の温かさに、良輔は少し安心感を取り戻していた。

「ただいま……」
美菜を送り届けた雄哉は小声で帰宅の挨拶をした。
「大丈夫だったのかい、アンタは！」
母の松子（まつこ）と父の誠（まこと）が大慌てで雄哉を迎えた。
「俺は平気だけど……良輔が……」
そこまで言ってから、雄哉は言葉を止めた。
「大丈夫よ。すぐに幹夫さんが駆けつけてくれたでしょう？」
「うん……」
「だったら、心配せずに待ってなさい。きっと、すぐに犯人を見つけてくれるさ。何せ、幹夫さんは優秀な人だからねぇ」
確かに、幹夫はこれまで県内でも有数の事件をいくつも解決してきた優秀な警察官である。そんな幹夫の我が子が事件に巻き込まれたのだから、捜査の手を緩めることはないだろう。
「明日、学校はあるのか？」
「わかんない。先生、出張だし」
「村の担当の……みそのさんに聞いてみたら？」
「そうか……そうするよ」
「電話場号は電話帳に書いてあるから」
「はいよ～」
雄哉は電話を取った。コールが1回。2回。3回。
「出ないや……」
「じゃあ事件がらみで忙しいのかもなぁ」
誠が心配そうに答えた。
「なんだか大変なことになったわねぇ」
松子もかなり心配そうだ。

「これからは、集団登下校とかになるんだろうな」
誠が雄哉に聞いた。
「いっつもそうだけどな」
「あぁ、そういえばそうねぇ。あの人数じゃねぇ」
「ハハハ！　それもそうか！」
大笑いする３人。まだ、事件はどこか他人事という感覚があった。

＜残り２４人＞

7／1　17：00

「それでは……お先に失礼します」
「あぁ……気をつけて帰ってくださいね」
職員の東田（ひがしだ）みそのに、村長の橋詰（はしづめ）　敬二（けいじ）は心配そうに声を掛けた。
「いやだ、村長。柄にもなく私に心配なんかなさらなくても大丈夫ですよ」
みそのはクスッと笑って「それじゃ、村長こそお気をつけて」と明るく声を掛けた。
執務室を出ると、暗い廊下が冷たい空気を保って続いていた。普段から明るいみそのではあるが、さすがにあのような事件があるとみそのとはいえ、さすがに緊張してしまう。
ヒールの音が響く。コツコツと、女性が歩くとき特有の音。聞きなれた音のはずであるにも関わらず、緊張してしまう。
「……？」
一瞬、足音が二重に響いたような気がしたのでみそのは思わず振り返った。気のせいだったのだろうか。廊下には誰もいない。
「気のせいね」
みそのは再び歩き始めた。
「……あら？」
途中で妙なことに気づいた。いつまでたっても、更衣室にたどり着けないのだ。
「道を間違えたのかしら」
しかし、村役場はそれほど広くないうえに、執務室から更衣室までは一本道のはず。それにも関わらず、みそのはいつまでたっても更衣室にたどり着けずにいた。
さらに、後ろからついてくる妙な気配が次第に近づいてきているような感覚に見舞われた。息を切らしながらみそのは走り続け、ようやく部屋を見つけたのでみそのはどの部屋なのかも気にせず、す

ぐに入った。
ドアを閉めた直後、何かが激突する音と衝撃が走った。やはり、何者かが追いかけてきていたのだ。
「ヒッ！」
みそのは思わず悲鳴を上げて尻餅をついた。
ドアを何度も蹴り飛ばすような音が響く。みそのは必死に暗がりの中を這いずり回り、ようやく電話を見つけた。
「２００番、２００番！」
２００番は村役場の内線電話で、執務室へと繋がる。みそのは必死で村長に助けを求めようとした。
だが、電話はザァーッと不気味な音を立てているだけで、まったく繋がる気配がない。
「何でよ、何で繋がらないの！？」
何回も受話器を上げては切り、上げては切りの繰り返し。やがて、ドアが壊れそうになるような音が耳に届き始めた。
バギッ！　ドガッ！　ミジッ！
「いや……いやぁぁ……！」
恐怖に体が正直に反応する。冷や汗が出て、喉が渇き、頭がクラクラするのだ。
「あぁ！　ケ、ケータイよ！」
みそのは大慌てでケータイを取り出し、交番の電話番号を表示して急いでクリックした。コール音が響く。
「あぁ！」
通じたのだ。誰か受話器を取った。
「も、もしもし！　東田です、村役場の東田みそのです！　助けて……助けて！」
きっと幹夫が応答してくれる。あのような事件があった後だ。まだ、交番で事件の対応に追われているはず。みそのはそう思っていた。
しかし――。

「帰れ」
ドスの利いた、低い声がみそのの耳に絶望的に響いた。
「いやあああぁっ！」
みそのはケータイを放り投げて本棚に体を預けた。ぶつかった拍子に、新聞がドサドサッと音を立ててみそのの横に落ちてきた。
「……え？」
みそのはその一面記事に目を見開いた。
「ど、どういうことよ……ヒッ！？」
ドアが開く。
「いやあああ！　な、なんでよ……なんでアナタがここに！？」
「……。」
「どういうつもり！？　いや……だってアナタ、ついさっき……！」
みそのの目の前にさっきまで見えなかったはずの夕陽が差し込み、その人物――遠藤　志甫が振り下ろそうとする刃物をギラッと反射させた。
「いやあああああああああああああああっ！」
その悲鳴を最後に、みそのの記憶は途絶えた。

＜残り２３人＞

7／1　18：00

「午後６時になりました。ニュースをお伝えします」
午後６時。良輔はリビングで食卓を家族と囲んでいた。ただ、昼間見たモノがあまりにも衝撃的すぎて、良輔はあまり箸が進んでいなかった。その代わり、といってはなんだが、自然とテレビに目が行く。いつもはそれを注意する摂子も、注意はしない。
ＮＨＫのニュースだ。真面目そうな男性キャスターがニュースを伝える。
「まずは、地震のニュースからです」
（地震か……）
良輔はあまり大きな地震を経験したことはない。なので、今まで地震のニュースと言われてもいまひとつ実感が湧かなかった。ただ、近畿地方出身だという父の幹夫は何でも、阪神淡路大震災という大地震を経験して、この手のニュースは苦手だそうだ。
良輔は無意識のうちにチャンネルを変えた。いつのまにか、これがクセになっていたのだ。
「ごちそうさま」
「あら……。もう終わり？」
「うん……。食欲なくって」
「そう。あ、残ったおかず、まだ食べられるから置いておいて」
「うん。ゴメンな」
フラフラとおぼつかない足取りで良輔は部屋に戻った。
「大丈夫かしらね……あの子」
「当分はしっかりと様子を見てあげたほうがいいだろうな……ん？」
幹夫が摂子の顔を見た。
「……。」
「なぁによ、あなた。そんなに見ないで。恥ずかしいわ！」
「いや……。摂子、ちょっと顔色悪くないか？」

「えぇ？　そうかしら？」
「光の加減……かな」
「そうじゃない？　別に体調はいつもどおりだし……」
摂子は近くにあった鏡で自分の顔を映してみた。
「もう！　全然悪くないわ。いつもどおりのキレイなお母さんよね～、美菜ちゃん！」
「うーん！」
美菜が満面の笑みで答えた。

「……。」
良輔はベッドに寝転がって音楽を聴いていた。思い出されるのは、倒れた志甫の表情ばかり。
実は良輔にとって、死体を目撃するのはこれが初めてではなかった。初めては、小学校３年生の頃。友達と木登りをしていて、友達が高さ１０メートル近くのところから足を滑らせて――。そこから先は、思い出そうとすると吐き気がする。
「……ッ！　ヒグッ……ヒック……！」
恐怖と不安でいつのまにか嗚咽を漏らしてしまっていた。そのときだった。

ピルルルルルルッ――！

「！？」
電話の発信音。しかし、妙に機械的な発信音だ。それだけではない。そもそも良輔は――。
「俺……ケータイなんか持ってないのに……」
テーブルの上で光るそれは、間違いなく携帯電話だった。音だけでない。バイブ設定までされているせいで、発信音と同時にブーッ、ブーッと不気味な音が響いてくる。
「……。」

良輔は恐る恐る近づいて電話の待ち受け画面（と呼ぶのを良輔はいまいちわかっていない）を開けて見た。そして表示されているその名前に目を疑った。

北川（きたがわ）　充（みつる）。

「ミツ……？　なんで……」

そう。それは間違いなくあの時亡くなった友人、北川　充だった。

電話を取ろうか取らないかしばらく迷った末、良輔は思い切って携帯の通話ボタンと思しき場所を押した。電話のマークで受話器が上がっている分、想像ができた。

ピッ、という音。嫌でも心臓の音が大きくなる。

「もっ……もしもし？」

そこから聞こえてきたのは間違いなく、懐かしい友の声。

「もしもし！　俺！　ミツだよ！」

間違いなく、充の声だったのだ。

＜残り２３人＞

7／1　18：10

「な……んで？　ホントに……充？」
「そうだよ！　それよか、元気してたぁ？」
「……。」
　良輔は身震いが止まらなかった。なぜ、携帯電話がここにあるのか。それよりもなぜ、充が生きて、話をしているのか。頭が爆発しそうだった。
「ゆ、夢……なんだ」
　良輔は自分をそうやって納得させようとした。
「これは夢だよ……。そうだ、そうだ！　夢だ！　醒めろ！　醒めろ！」
　次の瞬間、それまでテンションの高かった充の声がいきなり低い、ドスの利いた声に豹変した。
「んなわけねぇだろ」
「！？」
「お前……いま自分の状況がどんな状況かわかってるのか？」
「え……？」
「ハハハ……！　知らないっての？　幸せなヤツだな～」
　相変わらず低い声で話す充らしき人物。良輔は恐怖で押し潰されそうになったが、なんとか堪えて聞き返した。
「ど、どういう意味だよ！？」
「ハハハハ……！　知らないならいいよ。知らないほうが、幸せなことだってあるんだ」
「……何が言いたい？　お前……ホントに充か！？」
「さぁ……」
　良輔は冷や汗が止まらなかった。悪い夢なら醒めてくれ。何度も心の中でそう叫んだ。
「なんなら、確かめてみる？」

「え……？」
「今ね……お前の家の前にいるんだ」
「……！」
その直後、ドアを叩く音が響いた。良輔の心臓が飛び跳ねそうになった。
「開けてくれよ」
「……。」
「なぁ。俺の顔、見たいんだろう？」
「……。」
「なぁ。開けてくれよ」
良輔はパニックのあまり、携帯電話を放り投げた。
「投げんなよ。投げたって、切れないぞ」
「やめろ……！」
「開けてくれ」
「やめろ！」
「なぁ」
「やめろおおおおおぉぉぉ！」
良輔は本棚にあった分厚い辞書で思い切り携帯電話を叩きつけた。何度も、何度も。携帯電話はメギッ、バギッと音を立てて完全に潰れてしまった。
「はぁ……はぁ……」
悪い夢だった。そう思おうと良輔は顔を洗いに下へ降りた。
「……母さん？」
降りてから気づいた。妙に家中が静まり返っていることに。
「父さん？」
幹夫も摂子も返事がない。ドクン、と良輔の心臓が再び鼓動を早める。
「！」
不意にドアを激しく叩く音が一回、響いた。
「誰だ……？」

良輔は暗い廊下をゆっくり歩いた。
「誰かいるのか！？」
応答がない。ただ、ドアの向こう側に人の気配は感じ取られた。
――今ね……お前の家の前にいるんだ
先ほどの充らしき人物の声が蘇る。一気に恐怖感が沸き起こってきた。
「……。」
良輔はドアスコープから外を覗きこんでみた。
「……誰もいない」
上下左右見渡してみるが、誰の姿も見当たらない。
「やっぱ……気のせいだよな」
そう思い、廊下のほうを振り向いた瞬間だった。誰かが立っている。それだけで突然、良輔の心臓は飛び上がり悲鳴を上げた。
「うあああああああああああああああ――ッ！」
恐怖心で押し潰されそうになっていた良輔は一気にそのストレスを爆発させた。とにかく恐怖心を払いたい一心だった。靴箱の上に置いてあった高価な壷、それを思い切り正面にいた何かに叩きつけた。
壷が激しい音を立てて割れた。それから何かが倒れる音。暗がりの中での出来事で、良輔はとにかく必死だった。
まだ動いている！
良輔はそう思うといても立ってもいられず、傘立てを今度は乱暴に持ち上げた。傘が散らばるが、そんなことは関係ない。鉄製の傘立てを執拗に叩きつけ、良輔は息をするのも忘れんばかりに叩きつける行為を繰り返した。
5分ほど経って、ようやく良輔は落ち着きを取り戻した。いったい、この「何か」は何だったのだろうか。それを確認するために、良輔は廊下を覚束ない足取りで歩いて電気を点けた。

「ウグッ……！？」

良輔の目に映ったのは、完全に頭部が陥没した――担任の板倉（いたくら）聡明（としあき）だった。

＜残り２２人＞

7／1　18：55

どうしてこんなことになったのか。なぜ、担任の聡明が良輔の家にいて、良輔の背後に立っていたのか。彼にはそんなことを考える余裕もなかった。とにかく、いま目の前に横たわっている元・聡明だった「モノ」を良輔はズルズルと必死に引っ張っていた。

「隠さないと……隠さないと！」

自分が殺してしまった。とんでもない罪悪感に見舞われたが、すぐに焦りへと変わった。何とかして、自分がやったのではないことにしなければならない。幸い、摂子も幹夫もいない。目撃者もいないだろうと察した良輔は、とにかく聡明の死体を埋めることにした。

庭にある倉庫からスコップを取り出して、必死に地面を掘った。もう、7月に入ったので気温も湿度も日増しに高くなっていた。良輔は全身から汗を噴き出させながら、とにかく地面を掘り続けた。

「掘れた……！」

ようやくできた穴。元々、それほど手入れの行き届いていた庭ではなかったため、少々地面が荒れても恐らく摂子も幹夫も気にしないだろう。とにかく、いまは死体を隠すのに必死だった。

聡明の体を乱暴に地面に放り込み、土を元へ戻す。ゼェゼェと息が荒くなる。しかし、ここで見つかるわけにはいかなかった。摂子や幹夫が戻る前に、何とかして死体を完璧に隠さなければならなかった。

19時前。

「できた……！」

ほぼ完璧に、聡明の死体を埋めることができた。ガクンッ、と膝を付いて呆然とその場に座る良輔。

「よかった……よかった……」

掘り返したことなど想起させない、完璧な埋もめ戻し。良輔は肩で息をしながらも、力強く立ち上がった。倉庫へスコップを戻し、

振り向いた瞬間だった。
「……！？」
誰かが立っている。
「誰……だ？」
「え？」
「その声……」
雄哉だった。
「良輔だろ？　よっ！」
「あぁ……」
スコップへ自然と手が伸びる。
「どうしたんだ？」
「ん？　ちょっと用事があってさぁ」
「用事？　珍しいな、お前が」
見られていたら、どうする？
良輔の脳裏にそんな言葉がよぎる。
「そうでもないだろ～。なんだか、素っ気ないな今日は」
「そんなことねぇよ」
「そう？」
見られていたら、答えは一つしかない。良輔の頭の中ではその言葉が恐ろしいほどハッキリと、聞こえた。

殺(や)る。

友人に対して、いや、親友に対して初めて殺意というものを覚えた。雄哉に罪はないはずでは？　良輔は自問自答した。
いや、コイツは俺の罪を見た。
それが罪だ。
だったら、裁かれるべき。
いや、本来裁かれるべきは俺のはずだ。
どうする？

どうしたらいい……！？

「良輔？」

「！」

雄哉の顔が真正面にあった。スコップを握る手に力が加わる。

「どうしたんだよ……すげぇ顔色悪い」

埋めたばかりの土を普通に通過して、雄哉は良輔のそばへ歩み寄った。

「体調悪いんじゃないのか？」

「いや……そんなことは」

雄哉はペタッと良輔の額に手を当てた。

「わっ！　めちゃくちゃおでこ、熱いぞ！？」

「え？　そうか？」

「そうか？じゃねぇよ！　ヤバイって、この暑さは……。今すぐ家戻れよ」

「あ～……でも今……」

「ほら、つべこべ言わずに！　おばさーん！」

「！？」

良輔は雄哉の声にギョッとした。

「はぁーい？」

摂子の声が家の中からしたのだ。

「良輔のヤツ、すっごい熱あるんですよ」

「えぇ！？　どうしたの、良輔！」

摂子が玄関に出てきた瞬間、鳥肌が立った。

（そんな……！　母さん……家にいたのか！？）

ガクガクと良輔の膝が震える。

「どうした？」

幹夫まで出てきたのだ。

「そんな……ウソだろ……！？」

全部見られていた可能性が高い。音も聞かれていた可能性がある。

そもそも、聡明の殺害現場を見られていなかったのだろうか。音が聞こえなかったのだろうか。
「そんなはずは……ウッ……オエッ……！」
急に吐き気が催してきた良輔は同時に倒れ込み、そのまま意識を失った。
「良輔！」
雄哉が駆け寄る。
「良輔！？　良輔、どうしたの！？」
摂子も慌てて駆け寄り、良輔を抱いた。
「すごい熱……！　あなた、あなたー！」
「どうした？」
「良輔、スゴい熱なの！　すぐ病院に連れて行ってあげなきゃ」
「何？　よし、すぐ準備しよう」
幹夫が慌てて準備をすると言って部屋へ戻る。
「雄哉くん、悪いけど……」
「いえ！　それより……お大事にしてくださいね？」
「ありがとう。また、連絡するわね落ち着いたら」
「いえいえ！　そんなの、結構ですよ？」
「それじゃ悪いけど……」
「はい、また」
バタン！とドアが音を立てて閉まった。
「……。」
雄哉はしばらく閉まったドアを見つめ、それからしばらくしてその口元を緩めた。
「へへッ……」
不気味に歪んだその口元を雄哉は元へ戻し、野沢家を後にした。

7／1　19：30

「……っ！」
良輔が目を覚ますと、いつの間にか布団を被って横になっていた。
「俺……どうしたんだっけ？」
自宅の庭で倒れたのは覚えている。そこから先は意識が途切れ、記憶もない。
「あら、目ぇ覚ましたのね」
良輔の目の前には、村で唯一の診療所・川村医院の看護師、池田愛佳がいた。その少し先には、医師の川村　新吾。愛佳は２４歳、新吾は２６歳。年の近い二人だから意気投合し、診療所の雰囲気もかなり良い。村人の間では、二人は付き合っているという噂で持ちきりなのだが、二人とも職場仲間であるとして否定しかしない。
「今回は大変だったわね～」
愛佳は体温計を良輔に手渡した後、言った。
「ショックだったでしょう」
「……はい」
恐らく、志甫のことだろう。まだ、聡明のことは誰にも知られていないはずだから、変に焦るのはよそうと良輔は考えていた。
「それにしても、こんな平和な村でなんでこんなことが起きるのかしらね……」
「……そうですね」
志甫に関しては、良輔もまったく心当たりがない。志甫が誰に殺害されたのか、なぜ殺害されなければならなかったのか。良輔にはまったく説明ができない出来事だ。
「あなたのお父様、今回の事件はどう見てるの？」
「え？」
「だって、この村に出入りする人なんて滅多にないでしょう？　そうなると、やっぱり犯人は内部の……」

「池田さん。よしなさい」
新吾が制止する。
「何でですか？　事件のことを知る権利は、私たち医療関係者にもあるはずですよ」
「だからって、体調の優れない患者にそういうことを聞くのはいかがなものかと思うけれどね」
「……ですが、先生」
「また日を改めて、彼には来てもらえばいいだろう」
医療関係者、ということは検死とかをするのだろうか。それは検察官とかがするものではないのか。あまりそういう方面の知識がない、一高校生の良輔には二人のやり取りがいまひとつわからなかった。
「とにかく、今日はここでゆっくり休んでいきなさい。ご自宅には、もう連絡してあるから」
「はい……」
そう言って新吾と愛佳は病室を後にした。バタン、と扉の閉まる音がしてからは、静寂が良輔を包み込む。外を見ると、村の集落だろう、明かりが点々と見えた。
いったい、志甫を殺害したのは誰なのか。良輔にもそれが謎だった。その恐怖感と疑心暗鬼から、まさか自分が人を殺めてしまうことになるとは、予想もしていなかった。
「俺……どうしたら……」
そのときだった。
ギイィッ、と病室の扉がゆっくり開いた。良輔は布団を掴み、扉の向こう側へ視線を注ぐ。その向こう側から姿を現したのは、妹の美菜だった。
「美菜……？」
「お兄ちゃん。大丈夫？」
「あ、あぁ……」
なぜ美菜が一人でこんな場所にいるのか。良輔は不思議に思い、

病室に掛かっている時計を見た。すると、時刻は午後7時２０分。ひょっとすると、両親と来ているのかもしれない。そう思い、彼は美菜に聞いた。
「美菜、お見舞いに来てくれたの？」
「うん」
美菜の可愛らしい笑顔。それを見ると、安心できる。美菜がゆっくりと歩み寄ってくるので、いつも以上に抱き締めてやりたい。そういう気持ちに駆られた。しかし、美菜の口からその気持ちを一瞬でかき消すような言葉が次から次へと、出始めたのだ。
「あなたは、自分のやったことがわかってるの？」
「エ……！？」
ギクッと体が震える。
「わかってないんだ……。愚かで、幸せな人ね……」
「美菜……？」
「もうね……この村はこのままだとお終いなの」
美菜の声ではない。けれども、聞き覚えのある声だった。良輔はその声の主が誰だったのかを必死に思い出そうとする。それを遮るように、喋り続ける美菜。
「だけど、一人だけ。一人だけこの村を救える人がいた」
「やめろ。喋るな」
「その人は決断したの」
「喋るな！」
頭痛が始まった。極度のストレス状態に置かれているのが、良輔自身でもわかる。どれだけ語気を強めても、美菜は退かなかった。それどころか、ゆっくり良輔へ近づいてくる。
「この村を守るために……すべてを消すことを、ね」
「やめろ……！　どういう意味なんだ！」
「それはまだ言えない。だって、パニックを起こすかもしれないでしょう？　信じないでしょうし」
「村を救うんだろう！？」

「そうよ」
「だったら言えよ！」
「言えるものなら言いたいわよ！」
シン……と病室が静まり返った。
「私もね……。村を救うために決断したの」
「……お前、美菜じゃないな？」
「……鋭いわねぇ」
美菜の中にいるその人物がニッと笑った。
「誰だ、お前」
「さぁ……当ててごらんなさい」
良輔は必死に記憶を引っ張り出した。村にいる女性。美咲、美菜、摂子、靖代、松子、愛佳、今では亡くなった志甫、思い出せる範囲はそこまでか、と諦めたときだった。
「あ……その口調！」
「……気づいたわね」
ニィッと笑う美菜。それが彼女の意思ではないのはもう、目に見えていた。まるで操られているように、美菜の体がゆっくりと窓辺へ向かう。
「や……やめろ……！」
恐怖で体が動かない。窓枠に乗り、そのままゆっくりと美菜が、視界から消えていった。
「ひ……あああああぁぁぁぁぁぁぁ！」
ドシャッ――。
絶望的な音がした直後、それが見えた。その透明な姿。それはまさしく、村役場職員・東田みそのそのものだった。
「……美菜？」
良輔はゆっくりと立ち上がり、窓を覗き込んだ。
「美菜……美菜ぁ！」
地面に寝転がるそれは、上半身と下半身が綺麗に泣き分かれしている姿を呈していた。

「美菜ぁ！」
良輔の悲鳴が聞こえてそこでようやく、新吾と愛佳が病室へ駆け込んできたのだった。

＜残り２１人＞

7／1　20：30

美菜の事件現場では、新吾と愛佳が遺体の状況を調べていた。
「良輔」
父の幹夫が彼の名前を呼ぶ。しかし、虚ろな表情をしたまま、良輔はブツブツと美菜の名前を繰り返し、呼ぶばかりであった。
病院内では、警察の制服に身を包んだ幹夫が駆けつけていた。唯一の事件の“目撃者”になっている良輔に、話を聴きにやってきたのだ。
「良輔。顔を上げなさい」
ようやく上げた顔。その先には、強く見つめる幹夫の顔があった。急に恐怖心が湧き上がってきた良輔は必死に叫んだ。
「違う……違う、違う違う違う！　俺じゃない！　父さん！　俺じゃない……俺が美菜を……あんなことすると思う！？」
「落ち着きなさい、良輔」
「……。」
幹夫がフーッとため息を漏らした。
「良輔」
「……何？」
「もうひとつ、知らせておかないといけないことがある」
「……何？」
幹夫が疑いの眼差しで良輔を見つめながら、言った。
「板倉先生の……遺体が見つかった」
良輔の顔面が真っ青になっていく。
バレてしまった。しかも、父親に。
「板倉先生の死因は、撲殺だ。何か、大きな陶器で殴られたのか、頭蓋骨が陥没していた」
「……先生も」
うまくいった。そう思った。驚いた顔をしたつもりだった。

「殺されたの？」
「十中八九、その可能性が高い」
「そう……か」
自分が殺したんだ。そんなこと、言えるはずもなかった。
「遺体は、坂科川の土手から見つかったんだ」
「……へ？」
坂科川の土手。そこは、良輔の家からは１ｋｍも離れている場所だった。どちらかといえば、濱　大地や塚本　美々の家のほうが近いだろう。
「父さんとしては、遠藤さんに続き、これも殺人事件の可能性が高いとして、捜査している。間もなく、長野県警本部からの応援も入る予定だ」
「そっか……」
「さらに」
次の言葉に、良輔は身の毛をよだたせることしかできなかった。
「市職員の東田さんも、他殺体で発見された」
「ひ、東田さん！？」
突然の良輔の大声に、幹夫が目を丸くした。
「どうした？」
「いや……別に」
良輔はもはや、幹夫と目を合わせることができなくなっていた。
「とにかく、今は村人全員に外出禁止令を村長が出している」
「外出禁止令……」
相当な出来事になっているようだ。それもそのはず、たった1日で既に４人もの人間が亡くなっているのだ。
「父さんの個人的な判断だが」
それはまるで、良輔に問い掛けるような言い方であった。
「犯人は、村の中にいるような気がして、父さんはならない」
「……村の中に」
「そう。残念な……話だけどな」

フゥッ、と幹夫がまたため息を漏らした。
「ちょっと喉が渇いたな」
「そだな。ちょっと、ドキドキしちゃったし」
「何か飲み物を取ってこようか」
「うん」
そう言って、幹夫が席を外す。すぐに、良輔は頭をガシガシと掻きむしり始めた。
「ヤバい……ヤバい……」
聡明の遺体が見つかった。これは、良輔にとって打撃だった。自分の罪が明るみになったのだ。それ以上に、謎が残る。
「誰が……死体、動かしたんだ？」
誰かが、良輔が自宅の庭に遺体を隠したことを知っているのである。そうでなければ、遺体を移動させることなどできるはずがなかった。
「雄哉……？」
あの時、まさにその場面を見ていた可能性が高かったのは、雄哉だ。ひょっとすると、雄哉は良輔の罪に気づき、何かもっとわかりにくい場所へと思って、遺体を移動させたのだろうか。
良輔はわかりもしないことを、懸命に考え続けた。その時だった。
「……！」
ヘリコプターの音が聞こえてきたのだ。
「ヘリ？　何で……！　もう、来たのか？」
警察の応援が来ると聞いていた。ひょっとすると、そのヘリなのか。不安になった良輔は表を覗いてみる。しかし、新吾と愛佳が美菜の遺体の状況を調べているだけで、それ以外にヘリコプターの姿はおろか、人の姿すら見当たらないのだ。
新吾と愛佳も、ヘリコプターの音は聞こえていないのか、黙々と美菜の検死を進めている。
「気のせい……か。……ん？」
良輔の目に、テレビが見えた。

「そうだ。事件のこと……何かやってるかも」
テレビのチャンネルを適当に変え、ニュース番組らしいものを見つけたのでそれを見てみることにした。キャスターが深刻な表情で、ニュースを伝えている。
「……日に発生し……県……羽……村……。マグ……、……度……は……、東京でも4……」
「おい！　しっかりしろよポンコツテレビ！　何言ってるか聞こえねぇじゃんか！」
バシバシとテレビを何回か叩いた。それがまずかったのか、ブツン！と音を立てて映像が消え、音も聞こえなくなった。その直後だった。不意に、音がハッキリと聞こえたのは。

「死者は既に、４５０名以上を数えており――」

「え？」
死者４５０名。良輔の耳には、確かにそう聞こえた。
「４５０……？　何、それ……。っ！？」
頭に突然、火を点けられたような猛烈な熱さが襲った。
「アガッ……！」
そのまま、良輔は無様に倒れるしかなかった。そして、良輔を殴った人物は傍を通り過ぎ、さっきまで見ていたテレビを徹底的に破壊していく。
（死者４５０って……何が起きてんだよ……）
再び途切れる意識。

良輔の知らないところで、世界は確実に変わろうとしていた。

7／2　11：00

翌日。

村の会合などを開く小さなホールで、美菜の葬式がしめやかに行われた。良輔は写真の中で笑っている美菜の写真を、ただ呆然と見つめるしかなかった。呆然とする中で驚かされたのは、両親が思いのほか冷静だったということ。

良輔が病院で何者かに殴られ、意識を失うほどの状態になった昨晩も同じだった。気づけば自宅の布団で寝かされていたのだが、その時見えた幹夫と摂子の顔には驚かされた。二人とも、ずいぶん青ざめているように見えたのだから。

無理もないかと良輔は今になって思う。娘が殺害され、息子も何者かに襲われた。犯人は村人以外にいるかもしれないが、その可能性は極めて低い。ともすれば、犯人はよく知った顔の中にいるのだ。二人が疑心暗鬼に陥るのも無理はないだろう。

ところが、昨日の通夜の時間も二人は同じ表情を浮かべていた。良輔は悔しくて何度も涙したのに、摂子も幹夫も、まだ一度も泣いていない。ただ淡々と、美菜の葬式を進めていく。

（なんで……？　おかしくないか？）

まさか、二人が美菜を？

良輔の中で嫌な考えが頭をよぎる。しかし、美菜を殺したのは東田みそのの、幽霊のようなものだった。両親は絶対にそんなことをしない。良輔はそう、信じていた。

「良輔？　どこ行くの。もうすぐ始まるわよ」

相変わらず冷めた声をした摂子。少し嫌気が差したが、良輔はその感情を押し殺して言った。

「ちょっと気分転換。外の空気吸ってくる」

実際、良輔は線香の匂いで気が滅入っていた。煙たいのもあったが、やはりあの線香の匂いは好きになれない。なんだか、自分が死

の世界に足を踏み入れたような、そんな感覚に襲われるからだ。
あの時の、美菜であって美菜でない人物のセリフが蘇る。
――もうね……この村はこのままだとお終いなの。
あれはどういう意味だったのだろうか。そして、中途半端な情報でしかないが、ニュースで流れた死者４５０名の意味もわからない。いずれにしろ、正しい情報がほしかった。
ひょっとすると、美咲や雄哉なら何か情報を知っているかもしれない。そう思った良輔は、まず美咲に連絡を取った。
「おかけになった電話は現在、電源が入っていないか、電波の届かないところに……」
「タイミング悪いな」
良輔は舌打ちをして電話を切る。すぐに、雄哉のほうへ繋いでみた。しかし、すぐにプーッ、プーッと受話器が上がっているときの音がした。
「なんなんだよ！」
さすがにイライラしてくる。携帯電話を半ば乱暴にポケットへ押し込み、会場へ戻ることにした。暗闇の中、独りきりというのは不気味すぎる。その時、茂みの暗闇の中でボソボソと話す声が聞こえた。
「誰か……いる？」
良輔は息を殺してその暗闇へと近づいていく。そしてその暗闇を覗こうとした直前、急に声がした。
「兄ちゃん！　何やってんの？」
「うわっ！」
振り返ると、濱　大地がいた。屈託のない笑みを浮かべ、ギュッと良輔の服を握っている。
「なんだ、大地か……」
「何やってんの？」

「……ううん。なんでもない」
「本当？」
「うん」
「良かった」
大地が笑う。
「良かった……って、どういうこと？」
「だってさ、そこは」
大地が小学生らしからぬ、大人びた表情で笑う。
「昔から、子供は入っちゃいけない場所なんだから」
「え……？」
なぜ、中学生の自分が知らないような話を大地が知っているのか。
「な、なんでそんなこと知ってるんだ？」
「お父さんが言ってるんだ」
「大地の？」
「うん」
大地の父親――シングルファザーなのだが、濱（はま）　俊之（としゆき）は村で農業を営む男性だ。彼の育てる野菜は一級品で、県内は元より関東各地から中部地方にまで広く流通している。そんな野菜を村人の誼（よしみ）ということで、良輔たちも幾度となく分けてもらっている。
「それって、どんな話なんだ？」
「興味あるの？」
「あぁ」
この村の秘密に近づけるかもしれない。良輔は恐怖心もあったが、先に好奇心が勝ってしまったので、大地に頼み込んでその話を聞いた。
「まぁ、学校とかにある怪談……七不思議の、西羽生村バージョンみたいな感じだよ」
良輔は非常に興味深い話をしてくれた。
西羽生村には、昔から伝わる不気味な話があるという。まず、一つ目が現在役場の立っている場所。あそこは、一種のパワースポッ

トのようなものだという。しかし、そこへ役場を建ててしまったがゆえに、パワースポットの威力が歪んだものになり、磁場が複雑化したという。そのため、今でも妙な現象がたびたび発生するそうだ。

二つ目は学校。昔は森林だったが、そこを切り開いて作ったのが良輔たちの通う学校。木造校舎であるその材料はもちろん、切り開かれた森林の木々でできているという。その木の怨念なのか、どこかの教室に人の顔の形をした柱があるそうだ。それ以降もいろんな話を聞いたが、どれもこれも子供だましのような噂ばかり。良輔は次第に関心が薄れてきた。

七つ目。七不思議というのは、七つ目を知ると不幸になるという話があるのを良輔は思い出した。しかし、もう引き返せない。

「毎年、7月に入ると」

七つめの不思議というだけあってか、なぜか7月という月がピンポイントで充てられていた。

「村人に、異変が起きるんだって……」

ゾクッと背筋が凍るような感じに見舞われた。

「た、たとえば？」

「僕、よくわかんないんだけどさ」

大地は首を横に振る。

「お父さんは、ハッキョウしたり、ユウタイリダツとかいうのしたりして、人を襲うんだって言ってた」

発狂。幽体離脱。

そんなこと、ありえない。良輔自身、今までそう思っていた。しかし、幽体離脱は東田みそのが実際に見せたではないか。無論、彼女は死んでいたのだが。それでも、幽が体を離脱していた、という意味ではしっくり当てはまる。

発狂。

自分のことか？

良輔は自分が狂っていっているのではないかという恐怖感に襲われた。
「大丈夫だよ」
突然、大地が言った。
「良輔は、狂ってない」
「え……？」
「狂ってるのは、この世界なんだから……」
クスクスクス……と笑いながら、大地は葬式の式場へと戻っていった。
良輔はただ呆然とその場に立ち尽くすことしかできなかった。
＜残り２１人＞

７／２　１１：３０

――狂ってるのは、この世界なんだから……。

大地の言葉の真相を知りたくなった良輔は、村内の図書室へ向かった。村役場の奥にあるその部屋には、２５人しか住んでいない村とは思えぬほど豊富な蔵書量を誇る。

役場の関係者も美菜の葬式に出席しているから、今は無人だ。けれども、特別施錠もせずに役場は開かれたままだった。

良輔はすぐに図書室へ向かい、何か文献のようなものがないか探す。西羽生村は戦前から存在する村で、歴史も古い。多いときには３０００人近い人々が住んでいたというのだから、驚きだ。今では考えられない。

村の産業を長く支えてきたのは、鉱物だそうだ。石炭が多く採れたそうで、炭鉱関係者を中心にこの村はずいぶんと栄えた。１９５６（昭和３１）年６月に、人口はピークの３０４５人を数えたと文献にはあった。

「３０００人もよく住んでたな……」

何がきっかけでこれほど急速に過疎が進んだのか。今度はそちらを知りたくなって本を読み進める。気づけば、２０分ほど経って１１時３０分になろうとしていた。そろそろ、両親が良輔の姿が見えないことを心配しているかもしれない。そう思い、いったん小ホールへ戻ろうとした。

「そうだ……」

不意に、テレビのことを思い出した。日本のどこかで、死者が４５０人も出るような事件か事故が起きているのだ。この西羽生村の出来事もかなり奇怪であったが、そちらのニュースも気になる。

役所職員室へ向かおうとしたとき、突然後ろから男性の声がした。

「コラ！　こんなところで子供が何をやってる！？」
ドキッとして振り返ると、見覚えのない人物が立っていた。
「ここは役場だぞ？　子供の遊び場じゃないんだ」
「す、すみません……」
良輔は渋々、その男性のところへ駆け寄る。
「君はどこに住んでるの？」
「えと……字大貫（あざおおぬき）の野沢です」
「なるほど」
男性はメモを取る。なぜメモを取る必要があるのか、と良輔は不審に思ったが、聞くこともできないまま、男性のボールペンを走らせる音だけが響く。
「あの……」
「うん？」
「あなたは……？」
「あぁ、失礼。私、こういう者だ」
良輔に名刺を手渡すその男性は、日本地質学界甲信越支部の調査員である、原（はら）　元康（もとやす）と言った。
「地質学会？」
「ハハハ！　君たちには縁遠い世界かもしれないけれど、地質学っていうのも、この日本では大事なんだぞ」
「……。」
明らかに不審者扱いされそうになっていることに気づいた元康は、一枚の写真を見せた。
「ほら、こういうのは学校で習ったことあるだろう？」
いろんな土が層になっている写真を見せられた。良輔にも記憶はある。理科でやったことがあるのだ。
「うん！　俺、こういうの好きなんだ」
「そうかい！　嬉しいなぁ。最近、子供たちの理科や数学離れが起こっているって聞いたからね」
元康は途端に笑顔になる。良輔もこの人は安心だ、と判断したの

か、笑顔になった。
「でも、なんでこんなド田舎に来たんですか？」
「僕も、この村の出身でね。いや、今も住んでるんだけど、なにせ忙しくてななかなか戻れなくてねぇ」
「そうなんですか」
原といえば、確か、美人な人が字中北道（あざなかきたみち）の外れに住んでいた覚えがある。
「もしかして、原（はら）　陽子（ようこ）さんの……？」
「お？　陽子のこと、知っているのかい？」
「はい！　いつも学校行くときに前通るから、挨拶するんだ」
美人なのでついつい、雄哉も良輔も目が行ってしまう。目が合うと、必ず陽子は二人に挨拶をしてくれるのだ。
「そうか。いや、さっき家へ帰ったら陽子の姿が見えなくてね。どこへ行ったんだかと思って。とりあえず、役場へ来たんだけど」
「あ……」
村人はいま、全員美菜の葬式に出かけているのだ。陽子ももちろん、来ている。
「多分、陽子さんなら……」
「居場所、知ってるのかい？」
「俺の……妹の葬式に……」

式場へ案内することになった。良輔の状況を知った元康はその後、すっかり口数が減ってしまった。無理もないだろう。どういう風に声をかけていいのかすら、わからない空気に変わったからだ。
「君はいいのかい？」
「俺……なんとなく、抵抗があるので」
妹とはいえ、葬式に出ることにはまだ抵抗がある。死、というものがいまひとつ実感できない良輔は、葛藤していた。
「そうかい……」
寂しそうにする元康。その元康の顔を見て、良輔は何か、違和感

を覚えた。
（何だろう……）
ふと、目の前に美咲と雄哉の姿が見えた。雄哉を見てから、美咲を見てまた違和感を覚えた。
（何だ？　何が違うんだ……？）
ゾクゾクとする感じが伝わってくる。気分が悪くなってきた良輔は、元康に断ってお手洗いへと向かった。
顔を洗い、気分を落ち着けようとした。何度も洗い、ようやく平常心が戻ってきたので良輔はバッと顔を上げ、ハンカチを取り出し顔を拭いた。
「……！」
違和感の正体に気づいたのは、そのときだった。
顔色が違うのだ。
元康と雄哉は血色のいい顔をしていた。しかし、美咲も、死の直前の美菜も、顔色が青ざめていた。それだけではない。両親も、大地も、顔色が悪かった。思い返せば、川村医師も池田看護師も顔色は冴えなかった。
「無理ないだろ！　なにせ、この1日で人が……人が……死にすぎだもんな……。みんな、きっと動揺してるんだよ！」
良輔は無理やりそう思うことで、自分を納得させた。
美咲と雄哉が手招きする。
「どこ行ってたの？」
心配そうに美咲が聞いた。やはり、顔色が悪い。青ざめた感じだ。
「ちょっと、気分悪くて……」
「無理すんなよ？」
そう言ってくれる雄哉の顔色は悪くない。肝が据わっているのか、それとも、美菜の死に対して特に何も感情を抱いていないのか。後者でないことを良輔は祈るしかなかった。
「あ」
プルルルル、と発信音。

「俺の携帯だ」
「ちょっと。マナーモードか電源切るかしときなさいよ、バカ！」
「悪い悪い」
そう言って電話を持って、雄哉は会場敷地から表の道路へ出た。
「無神経なんだから……」
「……。」
外へ出た後、雄哉は電話に出た。
「もしもし……。あぁ、先生」
『どうだ？　そっちの状況は？』
「危ないヤツから順番に処理してます。とりあえず遠藤さん、東田さん、良輔の妹、板倉先生はもう処理済です」
『ふむ。こちらでもその４人にはうまく対処できている。どうだ？大変な仕事になりそうだが、できそうか？』
「できますよ。何でもやります」
ニッと雄哉が笑う。
「村を救うためならね……」
蝉が狂ったように鳴き出した。
『次は……彼らを頼む』
「了解です」
電話を切ると、後ろに誰かの気配を感じて振り返った。
「どうしたの？　お兄ちゃん」
塚本　美々と、濱　大地が立っていた。
「ううん。お兄ちゃん、ちょっと大切な人とお話してたんだ」
「ふぅん」
大地が上目遣いで雄哉を見つめる。
「ちょっと、お兄ちゃんがいいこと教えてあげるよ」
「いいこと！？」
美々が目を輝かせた。
「ほら、大地も行こうぜ」
「……うん」

不信感を抱きながらも、大地と美々は雄哉に連れられて会場を出て行った。

＜残り２１人＞

主な登場人物（7／2現在）

※ネタバレ注意！※

7月2日　11時30分現在

＜主要人物＞

☆野沢（のざわ）　良輔（りょうすけ）　［15］

長野県　西羽生村の羽生中学校に通う中学3年生。活発な少年で、勉強はあまり好きでない体育会系。部活は羽生中学校には陸上部か手芸部しかないため、必然的に良輔は陸上部に在籍している。村で続発する連続殺人事件に深く関わり、様々な違和感を覚え始めている。

◆姫路（ひめじ）　美咲（みさき）　［15］

良輔の幼なじみ。おしとやかで誰に対しても親切、滅多に怒らない。時たま吐く毒舌で良輔や雄哉をどん底まで突き落とすことがあるのだが、彼女にその自覚はない。良輔が単独で行動し始めていることに不信感を抱いている。

☆浦上（うらがみ）　雄哉（ゆうや）　［15］

良輔の幼なじみ。村の中では子供たちを取りまとめるいわばガキ大将的な存在。ただ威張り散らすだけではなく、成績もよく運動神経

もそこそこなので、良輔も多大な信頼を寄せている。しかし、殺人事件発生以後、不審な行動が際立っている。

＜野沢家＞

☆野沢（のざわ）　幹夫（みきお）　［４５］

良輔の父。村で唯一の交番へ勤務する。連続殺人事件の捜査に当たるが、娘を亡くし茫然自失状態にある。

◆野沢（のざわ）　摂子（せつこ）　［４２］

良輔の母。娘の美菜を亡くし、混乱状態にある。

◆野沢（のざわ）　美菜（みな）　［享年７］

良輔の妹。小学１年生で、羽生中学校内にある分校へ通っていた。良輔の目撃では、東田みその亡霊のようなものに取り付かれた挙句、病院から身を投げて死亡。

＜姫路家＞

☆姫路（ひめじ）　龍彦（たつひこ）　［４６］

美咲の父。村で唯一の銀行の出張所へ勤務する。

◆姫路（ひめじ）　靖代（やすよ）　［４４］

美咲の母。村のハズレにある食料品店でパートをしている。

＜浦上家＞

☆浦上（うらがみ）　誠（まこと）　［４３］

雄哉の父。村のハズレで食料品店「うらがみ」を経営している。

◆浦上（うらがみ）　松子（まつこ）　［４２］
雄哉の母。小学校と中学校での給食を作る調理師。

＜村民＞
（男性）
☆十河（そごう）　平祐（へいすけ）　［２５］
村内にある消防署分署へ勤務する消防士。

☆橋詰（はしづめ）　敬二（けいじ）　［５６］
西羽生村　村長。

☆板倉（いたくら）　聡明（としあき）　［３２］
羽生中学校および分校小学校の教師。良輔たちの担任。良輔に殺害された可能性が高い（良輔自身、この時の記憶が曖昧な状態）。しかし、遺体は隠したはずの良輔宅からは見つかっていない。

☆川村（かわむら）　新吾（しんご）［２６］
村で唯一の病院・川村医院の医師。

☆濱（はま）　大地（だいち）［１０］
村の小学校に通う小学生。事件以後、良輔に意味深な言葉をたびたび掛けるようになる。

☆濱（はま）　克彦（かつひこ）［３６］
大地の父親。妻を亡くした過去があるが、それを公にはしていない。

☆原（はら）　元康（もとやす）［４２］
地質学者。村の地質調査のために帰ってきたというが……。

☆？？　？？

（女性）

◆東田（ひがしだ）　みその　［享年４６］

村役場職員。独身の自称キャリアウーマン。何者かに殺害され死亡。

◆遠藤（えんどう）　志甫（しほ）　［享年２８］

環境省認定のフォレスト・レンジャーと呼ばれる職に就いている女性。何者かに殺害され死亡。

◆池田（いけだ）　愛佳（あいか）［２４］

川村医院の看護師。

◆塚本（つかもと）　美々（み）［１３］

村の中学１年生。純粋で人を疑うことを知らない。

◆塚本（つかもと）　泰江（やすえ）［３７］

美々の母親。特に定職に着かず、毎日ブラブラするいい加減な性格。

◆原（はら）　陽子（ようこ）［３８］

元康の妻。出張の多い主人を懸命に支える良き妻。

7／2　12：35

「あの違和感はなんだったんだろう……」
葬儀場の奥にある控え室で良輔は違和感の正体をなんとか掴もうと必死だった。美咲と雄哉の違い。昨日までは感じられなかったのだが、彼らは確実に何かが違っていた。
雄哉だけではない。途中で出会った、地質学者という原　元康も怪しさが抜けきらない。今のところ、不審点があるのは元康と、言いたくないが雄哉だった。
聡明の遺体を隠したときにいたのも、雄哉だった。雄哉はひょっとすると、良輔の犯行現場を目撃して、遺体を隠す動きまで見ていたので、あの川沿いへ隠してくれた可能性もあった。
しかし、雄哉自身その件に一切触れてこないのだ。
「なんで……俺、雄哉のことまで疑って……。そもそも俺だって、先生を殺しちゃったじゃないか……」
そう思うと恐怖で手が震えて仕方がなかった。恐怖に押し潰された挙句の犯行とはいえ、人を殺したことに変わりなどない。
「いっそのこと、父さんに自首するか……？」
しかし、美菜を亡くした両親にこれ以上追い討ちはかけたくないというのが本音だった。自分のことはどうなってもいい。ただ、両親をこれ以上苦しめたくはない。そう思うばかりだ。
「誰に相談しよう……誰に……」
そのときだった。
「！？」
不意に誰かがいる気配を感じたので、良輔は後ろを見た。しかし、そこには誰もいない。
「気のせいか……」
突然だった。
「ヒイッ！？」

良輔の両手を、誰かが掴んだのだ！
「ひっ！」
しかし、良輔は今机の上に手を置いている。一体、誰が掴めるというのだろうか。だが、目の前の机からは手が生えるように伸びて、良輔の手を掴んでいる。
「ひいいい！　は、放せ……放せぇ！」
すごい力だった。大人の男性なのだろうか、良輔が振りほどこうとしてもまったく太刀打ちできないのだ。
「ぎゃあああああああ！」
引っ張ったところで姿を現したのは、聡明だったのだ！
「いいい、いやだ、放して放してくれえええ！」
聡明の声が耳元で聞こえた。
（お前だって、早くもとの場所へ帰りたいだろ……？　先生が帰してやるから、おとなしくしてなさい……）
「元の場所！？」
どういう意味か、と聞こうとした瞬間だった。
「良輔！」
飛び込んできたのは雄哉だった。
「雄哉！　助けて……助けて！」
「せ、先生！？」
雄哉が驚くのも無理はない。目の前にいるのは、既に亡くなっているはずの聡明なのだから。
「畜生！　化け物め、良輔を放せバーカ！」
雄哉が必死で良輔を聡明の手から放そうとする。しかし、力が強くなかなか放そうとしない。
「良輔！　目を瞑れ！」
「えぇ！？」
「いいから！　早く！」
良輔は雄哉に言われるがまま、強く目を閉じた。
「サッダルマプンダーリカスートラクマーラジーヴァサンスクリッ

ト！」
雄哉は良輔が解せない言葉を発した。
「もう大丈夫だよ、良輔」
「……！」
良輔が目を開けると、聡明の亡霊（だったのかどうかも定かでない）は姿を消していた。
「……ありがとう」
「いいや。構わないよ」
「……。」
しかし、不審点はまだ残っている。良輔は勇気を振り絞って聞いた。
「雄哉！」
「うん？」
「あの……さ……」
心臓が飛び跳ねるように高鳴っている。けれども、ごまかしたくはないと思い、良輔は核心を突く言葉を吐いた。
「板倉先生の……死体を……」
「それは」
雄哉がニッと笑った。
「お前の知る必要のないことだよ」
体中の毛が逆立つほどに、不気味な微笑みだった。雄哉らしからぬ、恐怖と狂気が入り混じったような、笑顔とは言いがたい表情。良輔はそれ以上、追及することができなかった。
「お前、きっと参ってるんだよ」
突然、いつもの雄哉に戻った。
「え？」
「ほら……美菜ちゃんが亡くなって……精神的に参ってるんだ」
「……。」
あながち嘘ではない。妹を亡くして平常心でいられる兄が、どこにいるというのか。良輔は今の聡明の亡霊のような姿も、自分の混

乱で見た幻だったのかもしれないと思うことにした。そうでもしていないと、気が滅入りそうだったからだ。
「な？　こんなところで一人でいても、危ないだろう？」
「あぁ……」
こういうとき、親友の存在はありがたい。良輔はつくづくそう思いながら、立ち上がった。
「戻ろう。おじさんおばさんも、きっと心配してる」
「うん」
頭が少し痛むが、良輔はそれを我慢して立ち上がり、先を急ぐ雄哉の後を追った。
「良輔？」
「……雄哉、あれ……」
良輔は窓の外へ目をやった。
「美咲じゃね？」
「あれ？　ホントだ」
美咲が表を歩いている。
「何やってんだか、アイツ」
「……。」
「雄哉、アイツも呼んでこよう？」
「待て」
雄哉が良輔の手を引いた。
「お前は先に戻ってろよ。な？」
「え？　俺も一緒に……」
「いいから？　な？」
語尾を強めた雄哉に気圧されて、良輔は「うん」と力なく答え、両親の待つ部屋へ戻って行った。
良輔を見送った後、雄哉は表をぶらつく美咲に声をかけた。
「美咲」
美咲もすぐ雄哉に気づき、彼に駆け寄ってくる。
「もう！　すぐ二人してどっか行っちゃうから、私心配したんだよ

？」
「悪い悪い！　俺も、良輔が心配でさ。アイツ、すぐフラフラどっか行っちゃうから……」
「やっぱり、雄哉も心配なんだね、良輔のこと……」
美咲がそばに座って呟いた。
「当たり前だろ！　友達なんだから……」
「私も心配なんだけど……もっと心配なコトがあるの」
「もっと……？」
「うん」
美咲が立ち上がった。そしてゆっくり雄哉のほうを向いて、言った。
「雄哉」
「ん？」
「あなた……何か隠してない？」
「……！」
美咲が不敵な笑みを浮かべた。風が不意にわざとらしく、二人のいる駐車場に吹き付けた。

7／2　12：45

「あなた……何か隠してない？」
不敵な笑みを浮かべる美咲に、雄哉は鳥肌を立てた。
「か、隠してるって、何を？」
「例えば、やってはいけないことをやっちゃった……とか」
雄哉は心臓がバクバクと鳴るのを気にしないフリをして、美咲の微妙に核心をはぐらかす言い方に少し、腹立たしさを込めながら言い返した。
「お前が何を言いたいのか、俺にはわからないよ」
「……そう」
美咲は残念そうな表情を浮かべた。
「だったらいいの」
美咲の表情が、いつもの明るいものへと戻った。けれども、相変わらず顔色は良くないままだ。その顔色が、雄哉の決意をさらに固いものへとさせていることに、美咲自身は知るよしもない。
「もしもね。もしも、雄哉が話してくれる気になったら……いつでも、私に声をかけて」
「……。」
「ね？」
「……あぁ」
雄哉は人懐っこい顔を浮かべた。
「それじゃ私、中に戻るね」
美咲は手を小さく振ると、室内へと戻っていった。
「……。」
雄哉は美咲の姿が見えなくなったのを確認して、はじめに行こうとしていた場所へと足を向けた。
歩いて5分ほどの山道で、雄哉は茂みへと足を向けた。

「ゴメンね？　おとなしく、しててくれた？」
雄哉は山道から見えない茂みの中、村の中でも大きい楠が生えている場所に、彼らはいた。いや、そこへ強制的に連れて来られたのだ。
「ンー！　ンー！」
「ダメだよ、美々ちゃん……。大声出したらお兄ちゃん、美々ちゃんから先に何とかしないといけなくなっちゃうからね……」
大地は相変わらずまっすぐ、雄哉を見つめている。
「どうしたの？　その反抗的な目つき……」
「知ってるよ、僕」
「何を？」
「お兄ちゃん……今から、僕らを殺すでしょ？」
「……！」
大地の不敵な笑み。美咲のそれを彷彿とさせる同じような笑みだった。
「でも、それは仕方のないこと……。違う？」
「お前……誰だ？」
雄哉はグッと大地の顎を持ち上げた。
「大地だよ？　濱　大地……」
「……上等じゃん」
雄哉は服の背中の辺りからロープを取り出した。ゆっくりと、まずは美々のほうへと近づく。
仕方がない。
皆を救うためだ。
先生だって言ってた。
辛いかもしれないけれど、みんなの笑顔をもう一度見たいだろう。そう声をかけ、勇気を与えてくれた。
辛い。本当に辛い。けど、みんなの笑顔がもう一度見たい。そのためなら、自分の手を汚しても、構わない。
雄哉の頭の中で、その考えばかりが巡っていた。

美々が震えている。ためらえば、今までやってきたことがすべて無になってしまう気がした雄哉は、一気に美々の首にロープを巻きつけた。
だが。
巻きつける前に、それは起きた。
「あ……ガ……ガァ……！」
美々の首が、ゴキゴキと不気味な音を立てて凹み始めていた。突然の展開に、雄哉と大地が目を丸くする。まだ雄哉は、美々に一切手を掛けていない。
「な……なんだよ、なんだよコレ」
「……！？」
あっという間に、美々の顔が鬱血したようにドス黒くなって、ガクンと頼りなく首が前へ倒れた。
「ど、どうなって……」
「ヒグッ！」
大地が今度は悲鳴を上げた。
「だ、大地！」
「いやだ、嫌だ！　に、兄ちゃん……兄ちゃん！」
雄哉は耐え切れずに、大地のほうへと近づこうとした。先ほどまで何か、雄哉を追い詰めるかのような言葉を吐いていた大地が、いつものように雄哉を兄ちゃんと呼んでいる。しかし、その言葉は悲痛そのものだった。
「ガッ！」
しかし、大地へ近づこうとした途端、何者かに突き飛ばされたかのような感覚に襲われた。
ジンジンと右胸に痛みが残っていたが、そんなことは雄哉に関係ない。なんとしてでも大地を助けようとしたが、雄哉は大地に近づくことすらできないまま、美々の首と同じように大地の首がミシミシと嫌な音を立て始めた。
「あ……あぁ……だ、大地……！」

「ぐ……は……！　ゲボッ……がは……」
「あああああ……ああああああ！」
ガクン、と大地が首を前に倒した。
不気味なほどの静寂が周囲を包み込む。雄哉は力なくロープを落とし、その場に座り込んだ。美々と大地の遺体が、雄哉の目の前で首を垂らしている。
「なんなんだよ……。なんなんだよ！　聞いてねぇよ、こんな話！」
雄哉の頭の中で、先生から聞いた話とは違うことが起き始めていることに、対処できなくなってきていた。

――世界を救えるのは、君次第だから。辛いけれど、頑張れ。

「こんなので……世界が救えるのかよ！？」
雄哉は大声で叫んだ。その声が空しく響いていく。
「そこで何をやってる！？」
ビクッと雄哉は体を震わせた。
「そっ……十河さん！」
村で唯一の消防士、十河（そごう）　平祐（へいすけ）だった。
「は……早くそこから離れろ！」
「え？」
「お前知らないのか！？　この楠の噂……！」
「そ、十河さん？」
「いいからお前、こっち来い！」
雄哉は言われるがまま、平祐に手を引かれて先ほど通ってきた山道へと連れ出された。
「……。」
「十河さん」
「１０年前……俺が中学生の時、あの楠の前で遊んでいた男の子と女の子が……今みたいに、俺たちの目の前で同じように……死んだ」
「な……」

雄哉の頭が混乱する。
この村に隠されている秘密って、なんなんだ？
雄哉は今すぐに、美咲と良輔に会う必要があると感じた。平祐の話を聞いた後、絶対に彼らに会う。雄哉は胸の奥でそう、誓った。

＜残り１９人＞

７／２　１３：００

雄哉の不審な点が未だに納得行かない良輔は、今度は村役場の真向かいにある公民館へ足を運んでいた。公民館の中には図書室が併設されており、いろんな資料を読むことができる。

しかし、村民に起きている異変についてわかりそうな資料は、一冊もなかった。美咲や、両親を含む村民の顔色の悪さ。それは良輔自身にも当てはまるものだったのだが、そのような症状を示す病気なども資料では見当たらなかった。

いつか読んだ、サウンドノベル発のマンガのように、風土病のようなものなのかと思い、村の歴史書を調べたが、そのようなことにも触れられていなかった。

「あれ……？」

良輔はふと気づいたことがあった。

「へぇ……。知らなかった。長野って意外と多いんだ」

良輔は資料をペラペラと捲った。

「１８５３年、１８５８年、１９１８年、１９４１年、１９６５年、１９８４年……か。だいたい２０年おき……。となると、２０足せば……ちょうど今頃か」

今は２００９年。１９８４年から既に２５年が経過している。

「ん？」

良輔は隣のページに気になる描写を見つけた。

「救助の楠……？」

見覚えのある楠だった。

「あ。これ見晴らしの森にある楠じゃん」

良輔はなぜこの楠がこの資料に掲載されているのか気になって、読み始めた。

「人を殺(あや)める楠……ですか？」
雄哉は息を荒くしながら平祐に聞いた。
「あぁ。あの楠は２０年から３０年おきになぜかこの村の人々を定期的に殺めている」
「な、なんでそんな物騒な楠がこの村に……？」
「ことの発端は、この村に人が住み始めた頃だ。お前らが歩いてきた道、あるだろう？」
「はい」
「あの道……本当は、長野市方面へ続く街道ができるはずだった。ところが、あの楠が途中で邪魔になってな。それで切り倒す計画ができたそうだ」
雄哉は授業で聞いた村の歴史をできる限り思い出そうとした。西羽生村が誕生したのは明治末期の頃。昭和２０年代に人口はピークに達したそうだ。
「ところが、切り倒そうとした……今で言う工事関係者が次々と不審死を遂げたそうだ」
よくありそうな話だと雄哉は鼻で笑いそうになった。
「そうなんですか……」
雄哉は心の中で毒づいていた。よく歴史を調べもしないで、こうしたことを言う大人が一番迷惑だと。
「きっと、あの楠には何か秘密があるんだ」
それはあながち間違いではないですよ、十河さん。雄哉は心の中でクスクスと笑った。
「それじゃあ十河さん」
雄哉はちょうどいいと思い、平祐に提案した。
「今晩あたり、楠の秘密を探ってみませんか？」
「え？」
「ほら……草木も眠る丑三つ時っていうでしょ？　その頃に……」
「で、でも」
「怖いんですか？」

「怖くなんかない！　大丈夫だ」
「……そうですか」
雄哉はしばらく平祐から視線を外した。
「雄哉くん？」
「あ、なんでもありません！　ただ、俺が怖いので……」
次のターゲットを絞る。時間が残されていないのは、平祐ともう一人だった。
「川村医院の、新吾先生を連れてきてもいいですか？」
「川村先生を？」
平祐が目を丸くした。
「はい。先生も、こう言った怪談物に関心があるそうなんですよ」
ウソもいい所だった。しかし、二人には時間が残されていない以上、苦し紛れでもいいから二人を人気のない場所へ連れて行く必要があった。
「そうか……。じ、じゃあ、今日の何時頃に？」
「今日じゃないですけどね。午前2時半に、羽生川のちょうど……中州があるでしょう？　あそこでお願いしますよ」
「わかった」
「新吾先生には俺から連絡しておきます」
「了解。じゃ、午前2時に」
「はい」
雄哉は緊張した面持ちでその場を後にした。平祐の姿が見えなくなったところで、雄哉は不機嫌そうに携帯電話を取り出した。
「もしもし？　先生？　話が違うじゃないですか。どうして大地と美々は……？」
雄哉の顔色が変わる。
「そうなんですか……。ちょっと確認なんですけど、そちらでもそう言った操作が可能なんですか？」
電話の相手が「最後の手段だがね」と言った。
「全員をそのパターンで……できないんですか？」

それは無理だ、との答え。
「……なるほど。まぁ、そうですよね。引き換えに……が条件ですものね。それで？　大地と美々の分はどうなるんです？」
電話の相手の言葉を聞いた雄哉の表情が厳しくなった。
「それは強烈だな……」
電話の向こうから聞こえてきたのは「やっぱり、諦めるかね？」との問いかけ。
「諦めませんよ」
雄哉は力強く答えた。
「最低……美咲と、良輔を殺るまでは」

「それにしても……この村って本当に平和だったんだな」
良輔は歴史書を読み終えて一息ついた。いちおう交番や消防署はあるものの、これまでにこの西羽生村で人が亡くなったのは本当に寿命を全うした人か、戦争で空襲により亡くなった人か、自然災害によって亡くなった人かという3パターンしかなかった。
「そしたら……この異常現象は何なんだろう」
良輔が見た、聡明の亡霊のようなもの。あれは確実に幻覚でもなければ仕掛けのようなものでもなかった。
「俺たちの理解を超えたものだったりしたら……俺には手出しできないよな」
良輔はフゥッとため息を漏らした。
「あ」
思い出したのは、あの地質学者――原　元康のことだ。
「あの人なら、何か知ってるかもしれないな。ちょっと聞きに行ってみよう」
良輔はガバッと立ち上がり、図書室を出ようとした。
「……！？」
急に立ちくらみがした。寝不足というわけでもないのに、この立ちくらみはなんだろうか。良輔には思い当たる節がない。

「何かが……絶対起きてるな」
自分自身だけではない。この村で確実に、何かが起きている。良輔はそう確信した。
「良輔？」
突然聞こえた声に驚いて顔を上げると、美咲がいた。
「なんだ……。美咲か」
「なんだとは失礼ね。こんなところで何やってるの？　まだ……」
言葉を一旦切った。
「美菜ちゃんの……式の最中よ？」
「……わかってる」
美咲がそっと良輔の手を握った。
「辛いかもしれないけど……戻ろう？」
「……あぁ」
美咲もやはり、顔色が悪い。
「私、先に行くね」
「わかった。後で俺もすぐに行く」
美咲はニッコリ微笑んで、元来た道へと引き返して行った。
「……！？」
その美咲の後ろ姿――というよりも、美咲の首筋に良輔は視線が釘付けになった。
「なんだ……？」
その首筋には、まるで刺青か何かのようにクッキリとその文字が彫られていた。
「３５：０１：５０……？」
その数字が何を意味するのか、良輔にはまったくわからなかった。しかし、最後の５０が、なぜかどんどん減っていく。あっという間に５０から４０へと減ってしまった。
「なんだ……？　え！？」
良輔は自分の右腕に、美咲とほとんど変わらない数字が彫られていることに気づいた。

「３５：４３：３２……」
美咲と同じように、３２がどんどん減っていく。
「なんだ……！？」
良輔はその数字を見た途端、全身の毛が逆立つような感覚に見舞われた。次の瞬間、良輔は走り出していた。
「りょ、良輔！？」
美咲が呼ぶのにも答えず、良輔はいままさに自分の妹の葬儀が行われているホールへと走り出した。

7／2　13：20

「良輔！　どこへ行ってたの！？　心配したのよ……ちょっと、良輔！？」
　良輔は摂子の言うことも聞かず、美菜の遺体が安置されている部屋に入った。
「どうした？　良輔」
　ハァハァと肩で息をする良輔を見て、幹夫が目を丸くした。良輔は勢いよく部屋に駆け込むと、美菜の遺体が安置されている棺の蓋を開けた。
「良輔！　どうしたんだ！？」
　幹夫が良輔を止めようとするが、彼はその手を振り払い、美菜の冷たくなった体を抱えた。
「どこかに……どこかにあるのか？」
　良輔は必死になって美菜の小さな体中を探し回った。
「あっ……！」
　探していたそれは、美菜の足の裏に小さく彫られるように浮かんでいた。
「００：１９：５３……。１９分と５３秒ってことか？」
　しかし、美菜のその表示はもう動いていない。良輔は自分の刻印（それ）を見てみた。
「３５：２３：２０……」
　ほぼ、確信を持てた。これは何らかの時間を表しているのだ。良輔は幹夫や摂子にもその刻印があるのかどうかを確かめたかったが、今では怪しまれるだけだと思い、やめておいた。
「良輔……。お前、どうしたんだ？」
　幹夫が心配そうに良輔の顔を覗きこむ。
「も……もうすぐ、火葬するんだよな……？」

「あ、あぁ」
「最後に……美菜の顔を見ておきたかったんだ」
それらしい理由だったと良輔は思った。
「そうか……」
幹夫は優しく良輔の頭を撫でた。その最中も良輔はまったく違うことを考えていた。
（このことを誰に伝える……？　雄哉は無理だ。アイツはきっと、何かを隠してる……。美咲は？　いや……。そうだ！　大地はどうだろう？　俺のことを兄貴のように慕ってくれるし！　そうだ。大地ならとりあえず……。いや、でも幼すぎるか……）
「良輔」
摂子が良輔を呼んだ。
「何？」
「消防の十河さんが、あんたを呼んでるわよ」
「十河さんが？」
良輔は首をかしげた。それまで接点がほとんどなかった平祐が、自分に何の用だというのか。
ひとまず良輔は平常心を装って表へ出た。
「よう」
「こんばんは」
「実は……お願いがあって来たんだ」
「お願い？」
平祐は一連の出来事を良輔に伝えた。
「ほ、本当ですか？　それ」
「それが本当かどうかを確かめるために……川村先生と俺と浦上くんで、確かめることになったんだけど……何か、不安で……」
その気持ちは良輔もよくわかっていた。ましてや、怪談じみた話を怪しさが拭えない雄哉と共に探りに行くというのだから、平祐も不安になるのは無理がないだろう。
「それで、俺に跡をつけてほしいってことなんですよね？」

「あぁ……無理を承知なんだが」
良輔も不安だった。しかし、何かがわかるかもしれないという期待感が急に沸き起こり、すぐに答えは出た。
「明日の……午前2時ですよね？」
「あぁ。来てくれるのか！？」
「はい」
雄哉のこと。楠の話。すべてを知るために、良輔は行くことを決意したのだった。

翌日午前2時。
両親が寝静まったのを見計らって、良輔は自宅を抜け出した。そして約束の時間である午前2時より少し前に、良輔は約束の場所である羽生川の中州に近い茂みに無事到着した。
「こんなところで用事って……雄哉、やっぱり変だ……」
良輔は最近の雄哉の不審な行動に身震いした。友人の考えがまったく読めない。
「暗いし……普通に怖すぎるだろ」
虫の鳴き声がする。良輔は自分の息の音が漏れて、誰かに気づかれないかどうか不安で仕方がなかった。
遠くで話し声がする。そして、足音が近づいてきた。
「待ち合わせ場所は、このあたりだろう？」
その声は平祐と新吾だった。
「それにしても、なんでまた雄哉くんはこんな場所を指定してきんだ？」
「さぁ……。人気が少ないほうがいいとか言ってましたけど」
平祐は新吾の問いに戸惑いながら答える。
「何か変なこと考えてるんじゃないだろうな」
新吾が面白半分で呟いた。
「まさか！　雄哉くんに限ってそんなことは」
「ハハハ！　だよな！」

良輔もそう信じたかった。しかし、雄哉の行動がおかしくなってきてから、自分の中でそう思いたいのに、心がその思考に追いつかないのだ。
その時だった。
ヒュウッ……と何かが空気の切る音が、良輔の耳に響いた。直後、グジャッ！と何かが潰れるような音が遅れて良輔の耳に伝わる。
「ひゃあああああああああああああ！」
それは平祐の悲鳴だった。バシャアッ！と何かの倒れる音。良輔は驚いて茂みから平祐と新吾のいる場所を覗き込んだ。
「……！」
新吾の頭に、鉈のようなものが刺さっているではないか。
「ひっ！　うあああああ！」
平祐が逃げ出そうとしたと同時に、新吾の頭から鉈を抜き取り、その人物は容赦なく平祐の脳天に鉈を振り下ろした。
グジャッ……！
一瞬だった。そのまま川の中に平祐は倒れ込み、もうピクリとも動かなかった。
「あ……あぁ……」
良輔は声が漏れないように口を覆うのに必死だった。
「ゴメンなさい……。新吾先生、平祐さん……」
聞きなれた声が良輔の耳に響き渡る。
「でも……もう時間がないんですよ。予想以上に疲弊が進んでいて、皆さんのカウントダウンが縮まってる……」
月明かりが雲間から降り注ぎ、川の中で立ち尽くすその人物を照らし出した。
（う、うそだ……！）
それは一番の友人である、雄哉の姿だったのだ。しかし、その姿はもはや見慣れた友人の姿ではなかった。
平祐と新吾の返り血を浴びた、狂った姿だったのだ。
（カウントダウン……？）

雄哉の言葉がフラッシュバックする。良輔は慌てて自分の刻印を腕まくりして見た。
（１７：３０：２９！？）
先ほどまで確かに２９：３２：４５だったはずの刻印が、なぜか１７まで減っていたのだ。
（疲弊って……なんだ！？　でも、俺の刻印も確実に減って……カウントダウンと、この腕の刻印は関係があるのか！？）
思わず尻餅をついた良輔。その時、メキッ！と木の潰れる音がしたのだ。
「！」
グルン！と雄哉が良輔のいる茂みを睨みつけた。
「……！」
恐怖のあまり震える良輔。パシャパシャと雄哉がこちらへ向かって歩いてくる。
「誰かいるのか……？」
「……。」
「素直に出てきたら、許してやるからさ……」
しかし、恐怖のあまり良輔はだんまりを決め込んでしまった。
「……そこらへんにいるのはバレバレだっつーのにさ」
突然声を低くする雄哉。そして、とても良輔の知る雄哉とは異なる行動を、開始するのだった。

＜残り１７人＞

7／3　02：05

ズン！と音がして、良輔の真横に血で染まった鉈が下りてきた。
「……っ！」
思わず声が出そうになったが、辛うじてその気持ちを堪えた。どうやら良輔の居場所は雄哉からは見えていなかったようだ。
「気のせいか……？」
「……。」
良輔は涙がこぼれそうになったが、泣くと嗚咽が漏れてしまうので必死で堪える。その時だった。
電話の音がした。暗闇の河原に響き渡る、無機質な機械の音。雄哉は電話をすぐに受けた。
「もしもし」
『もしもし。わかる？　私』
「おう」
（美咲……！？）
『今ね……良輔の家にいるの』
「どうだった？」
『簡単。お二人とも、よーく眠っていたから……』
「そっか……。待て」
雄哉の声色が変わった。良輔の心臓は破裂しそうなほど鳴り響いている。
「良輔は？」
自分の名前が出た途端、心臓が飛び出すような感覚に見舞われた。
『いなかったわ』
「……そうか」
雄哉はなんとか聞き耳をそばだてて電話の相手の声を聞き取ろうとした。

『でも大丈夫よ。これでご両親はもう、安心』
「そっか」
いつもの雄哉の声色に戻る。あの人懐っこい声だった。
「ゴメンな……。辛い思いさせて」
『いいのよ』
雄哉が吐いた言葉を聞いて、良輔は愕然とする。
「美咲」
その後の会話はよく聞き取れなかった。いつの間にか雄哉の気配はなくなっていた。どれくらい時間が経ったのかもわからず、良輔はずっとしゃがみ込んでいた。
「美咲が……？　雄哉と、美咲が？」
アイツらがグルになっている？　俺は騙されていた……？
良輔の中にグルグルとおぞましいほどの疑心が生まれていた。
「家に……家に帰らないと」
良輔はそっと茂みから顔を出し、周囲に誰もいないことを確認して飛ぶように家へ帰った。
驚くほど息切れが早かった。気分が妙に高揚しているせいか、普段起きていない時間帯に起きているからかはわからなかった。
見慣れた自宅。良輔は意を決してドアを開けた。
「……。」
特に家が荒らされている気配はなかった。リビングもダイニングも、変化はない。つばを飲み込み、良輔は寝室に入った。
「う……」
良輔の視界に入ってきたもの。それは数十分前まで寝息を立てていたであろう、幹夫と摂子の姿だった。
「うあああああああああああああああ！」
良輔は二人が横たわる布団に駆け寄った。
「父さん！　母さん！」
グチャッ……と不快な音と嫌な臭いがした。二人の頭部からとめどなく流れる血が、布団を濡らしていた。

「そんな……なんで……」
遂に身近にいる、大切な人にまでこのような事件に巻き込まれることを、この連続殺人事件が始まってからある程度は覚悟していたものの、いざ目の当たりにすると衝撃以外のなんでもなかった。
「ゴメンね、良輔」
ビクッとして振り向くと、美咲がそこに立っていた。
「美咲……」
「おじさんとおばさん、私が……殺したの」
「なんで……なんでこんなことすんだよ!?」
「良輔は雄哉から何も聞いていないの?」
「聞いてるわけないだろ! 俺……それに見たんだ! 雄哉が新吾先生と平祐さんを殺してるのを」
「違う!」
美咲が大声で叫んだ。
「何が違うんだよ!」
「わかってよ……時間がないの。急がないと私たちみんな……」
「美咲」
驚いて振り向くと、雄哉が立っていた。
「雄哉……」
「よっ」
雄哉はいつもの雰囲気で近づいてくる。良輔は警戒しながら、雄哉の動向に視線を注ぐ。
「そんなに警戒すんなよ。友達だろ?」
「俺……知ってるんだ」
「何を?」
「お前が……いろんな人を殺してることを!」
「……。」
一瞬にして雄哉の表情が変わった。
「そっかぁ……」
クククッと不気味な声が響き渡る。美咲と良輔は雄哉から視線が

外せずにいた。
「じゃ、話早いじゃん」
雄哉がポン、と美咲の体を叩いた。
「お疲れ、美咲」
次の瞬間、美咲の体がフワッと透けるように消え初めたのだ。

＜残り??人＞

7／3　03：12

「みっ……美咲……！」
信じられないことに、美咲の体はスウッと吸い込まれるように透明になり、次第に良輔の前から姿を消し出したのだ。
「うあああああああ！　美咲、美咲ぃ！」
良輔は辛うじて握ることのできる美咲の手を握り締めた。美咲が何か言っているのを感じ取った良輔は、必死に薄れていく美咲の顔に耳をくっつけた。
「何？　なんだよ、聞こえない！」
「……て」
「え！？」
「安心して。雄哉が……良輔も助けてくれるから」
「え……？」
「また、会おうね」
「みっ……さき……」
そのまま、美咲の姿はまるで初めからなかったかのようにスッと消えてしまった。
「……お前が」
良輔が涙をこぼしながら雄哉を睨みつける。
「お前が殺したのか！？」
「……。」
雄哉は何も答えず、腰の辺りに隠し持っていた拳銃を取り出した。
「どっ……どっからそんなもん……」
「美咲がお前の親父、殺しちゃってくれたからさ～。こんなの取るの、カ・ン・タ・ン」
「ふざけやがって……！」
良輔が立ち上がろうとすると、雄哉はスッと銃口を向けた。

「動くな」
「……お前、何が目的でこんなこと……」
不意に雄哉が動きを止めた。
「もしもし」
「……？」
「はい。はい……え？」
雄哉の顔色が変わる。
「……わかりました」
「誰と喋ってんだ？」
「俺は平気です……」
雄哉の顔が笑顔になる。
「コイツらが……元気でいてくれれば俺は、それでいい」
良輔は雄哉の言動をまったく理解できずにいた。
「なっ……何が、何が俺たちが元気でいればいいだ！　お前が……お前が美咲もそそのかして、この村の人たち、殺したんだろう！？」
雄哉は何も言わず、銃を再び良輔に向けて構えた。
「何とか言えよ！　この最低野郎！」
「何とでも言えよ」
雄哉が冷静に言い放った。良輔はもはや、目の前にいるのは親友でもなんでもないと感じ取っていた。ただの、殺人鬼だと理解した。
「うわあああああああああああ！」
美咲。
美菜。
幹夫。
摂子。
この村にいた、大切な仲間たち。
すべてが、雄哉によって過去のものにされたとしたら。
そう考えるだけで、良輔は気が狂いそうだった。
「殺してやる！」
良輔はただ、それだけを考えていた。しかし、丸腰の良輔にそん

なことはできるはずもなかった。

パァン！

乾いた音が響き、良輔の腹部に衝撃が走る。

「あっ……！」

パァン！

二発目が、正確に良輔の左胸部を打ち抜いた。

「……あ」

そのまま仰向けに倒れる良輔。ドンッ……と体が地面に叩きつけられる。

「……。」

雄哉が、倒れた良輔を見下ろしていた。雄哉はそっと跪(ひざまず)くと、良輔の体を抱き締めた。

「元気でな……」

「……？」

ゴポッと口から血が溢れる良輔。雄哉の言葉の意味がまったく解せないでいた。

「また……会おうな……」

それだけを言うと、雄哉はスッと立ち上がり良輔のところから立ち去ろうとした。

（逃……がす……か！）

良輔は必死だった。友人や家族を殺した殺人鬼をみすみす、逃すつもりなどなかった。最期の力を振り絞り、良輔は必死で雄哉が置いていった拳銃を右手で握り締めた。

（バカ……や……ろ……！）

パァン！

立ち去ろうとした雄哉の左胸に、衝撃が走った。
「なっ……！？」
驚いて雄哉が振り返ると、良輔が先ほどまで自分が構えていた銃を握り締めていた。
「お前……クソッ！」
しかし、良輔は怯まない。もう一度引き金を引くと乾いた音がして、そこから発射された銃弾は見事に雄哉の額を撃ち抜いた。
そのまま雄哉は、良輔からは見えない角度へ倒れていった。
「ハァッ……ゲボッ！」
良輔の口から大量の血液が吐き出される。
「誰か……生き……残ったのかな……」
一体、雄哉がどれだけの村人を殺害したのかはわからないままだった。しかし、良輔は後悔などしていなかった。もしも、生き残っている村人がいるとすれば、自分は彼らを救ったのだ。そう感じていたからだった。
「あ……」
自分の右腕に刻まれた、謎の刻印がいつの間にか「００：００：１２」にまで縮まっていた。
「へへ……。これ、俺の寿命ってか……？」
良輔はクスッと笑った。
「こんなことになるなら……」
最期に確認したのは「００：００：０７」だった。
「もっと……」
何を言いたかったのかは自分でもわからなかった。
そのまま良輔の意識は、暗闇に吸い込まれるようにして消えていった。

<残り０人？>

7／3　08：34

（お兄ちゃん……）
「……。」
（お兄ちゃん！）
「……？」
（良輔！　良輔！）
「ん……」
「良輔！」
「え……！？」
驚いた良輔が目を覚ますと、目の前には美菜、摂子、幹夫が立っていた。
「良輔ぇー！」
摂子はそのまま良輔を押し倒すようにして抱き締めてきた。
「えっ！？　かっ、母さん……！？」
「ウッ……ウウウ～ッ……！」
良輔はまったく理解が追いつかなかった。ここはどこなのか。殺害されたはずの美菜や摂子、幹夫がなぜ目の前にいるのか。
「そっか……ここ、天国……とか？」
「何バカなこと言ってんの！　アンタ……ウチの家族で目ぇ覚ましたの、最後なんだからね！」
「目ぇ……覚ました？」
「あっ！」
聞き覚えのある声に振り返ると、事件のきっかけになったあの遠藤　志甫が立っていた。
「野沢くーん！　よかった、君も目ぇ覚ましたんだね！」
「遠藤さん……？　え……ちょ、いったい何がどうなってんだよ……」

摂子と幹夫が顔を合わせた。
「良輔。これを見なさい」
ベッドの傍に置かれていたテレビのスイッチを、摂子は入れた。
女性キャスターがニュースを伝えている。
「引き続き、甲信越地方で発生しました甲信越地震に関するニュースをお伝えします」
「地震……？」
「7月1日午前7時４５分頃、長野県西羽生村の南西２ｋｍを震源とするマグニチュード８．２の非常に強い地震が発生しました。長野県長野市、千曲市、安曇野市、松本市、西羽生村で震度７、長野県飯田市、岐阜県北部、新潟県中越地方、静岡県西部、愛知県東部など広い範囲で震度６強、東京都２３区でも震度５強から一部地域では６弱を観測するなど……」
「……。」
良輔の頭の中での処理がまだ追いつかない。先ほどまで、自分が事件に巻き込まれていた西羽生村で、震度７の地震という報道の意味がまったく理解できないでいた。
「どういうこと……？」
「実はね」
摂子が話そうとしたときだった。
「おい！」
飛び込んできたのは、新吾だった。
「浦上さんの雄哉も、目ぇ覚ましたぞ！」
「！」
その言葉に良輔の表情が強ばる。しかし、周囲の反応はまったく違った。
「本当！？」
摂子が飛び上がるような大声を上げた。
「良かったなぁ！」
幹夫もドンドン！と良輔の肩を叩く。

（何が……どうなってんだよ……）
ワイワイと騒ぐ家族や村人たちの後ろを、そっと初老の男性が通った。
「君が……最後の生存者だね？」
良輔を見て微笑み、そう語る男性に良輔は警戒心をむき出しにして応えた。
「最後の……？」
「説明しよう。こっちへ、いらっしゃい」
「……はい」
良輔は体のあちこちに痛みを感じていた。
「痛むかい？」
「ちょっと……」
「そうだろうね……」
良輔は案内されるがまま、コンピューターがたくさん置かれている部屋に入っていった。
「これは……？」
「バイザーコンピュータ……。バイザーとは、日よけという意味を持つんだが、まぁ、この場合はどちらかというと覆う、という意味合いを含んでいる」
「はぁ……」
「このコンピュータはね、私が開発したんだが。人の記憶を別の記憶で覆い込み、作りかえることが可能なんだよ」
「は！？　そ、そんなことして大丈夫なんですか！？」
「大丈夫だよ。実際、君たちの記憶を覆って今回、作り変えたんだから」
「……。」
理解を超えた男性の発言に、良輔は目を点にする。
「あぁ、自己紹介をしていなかったね。私は飯塚（いいづか）　毅（たけし）。この病院の院長だ」
それから毅はひとつひとつ、丁寧に説明してくれた。

７月１日午前７時４５分。既に良輔たちからその瞬間の記憶はあまりにも衝撃的すぎるため、作り変えられているのだが、西羽生村の南西２ｋｍを震源とする非常に激しい地震が村を襲った。激震に伴い、村の建物は一瞬で倒壊。さらに、村北部に迫る羽生山が山体崩壊という大規模な土砂崩れを発生させ、村の９割を土砂で覆ったのだという。

しかし、この大規模災害の発生にもかかわらず、救助は素早く行われた。村の南端で、自衛隊による訓練が行われていたのだ。その自衛隊員たちが土砂災害に見舞われた村人たちを次々と救助。そして、この病院で治療とバイザーコンピュータによる記憶の改変を行い、村人たちを救ったと言うのだ。

「ちょっと……待ってください」

良輔がストップをかけた。

「村人が……どこにいるかなんて、自衛隊がそんな知ってるもんですか？」

「それを教えたのは、俺だよ」

良輔が振り返ると、雄哉が立っていた。

「雄哉……」

雄哉はニッコリ笑いながら、良輔のそばにたった。しかし、良輔は警戒心を激しく出して、雄哉から離れていく。

「心配すんな。あれは俺だけど、俺じゃない」

「はぁ？」

そして雄哉は語り始めた。

「あの日……母さんに頼まれて、俺は店の届け物を自衛隊の駐屯地に届けに行ったんだ。そこで……あの地震が起きて、村が土砂に飲まれるのを見たんだ」

「……。」

「村人であの時間、土砂に飲まれなかった場所にいたのは俺と自衛隊の人たちだけ。俺は……自衛隊の人たちと一緒に、村人を助けに行った」

「……。」
「でも、お前も含めて誰も彼もが大怪我してるし、意識ねぇし……。そんな時、そこにいる飯塚先生が言ったんだ。怪我は治療できるが、意識が戻るか戻らないかはお前ら次第だって。俺はそんなの、嫌だって言った」
　良輔は涙ながらに語る雄哉の言葉をゆっくり、飲み込んでいった。
「そうしたら……そこにあるバイザーコンピュータでお前らの……意識に入り込んで、記憶を改変させて……強制的に、意識を取り戻す方法を、先生教えてくれた」
「もしかしてそれが」
「そう。この3日間の事件ってわけだ」
「……。」
「続きは私から説明しよう」
　毅が前に立った。
「このコンピュータは、意識に介在できる……あぁ、入り込むことができるのはもうわかったね？」
「はい」
　良輔はうなずく。
「今回……雄哉くんを除く村人２４人の意識は正直言って、生きるか死ぬかの狭間にあったんだ。聞いたことないかい？　賽の河原というのを」
「なんかの……漫画で読みました」
　毅は目を丸くした。
「最近は何でも漫画で勉強できるもんなんだなぁ。バカにできないね」
　そう言ってから毅は続ける。
「その賽の河原だとか、三途の川と言われる場所に、君たちの意識はあったんだ」
「……。」
　良輔は首を傾げる。雄哉も「俺も正直あんまわかってねーけど」

とケラケラ笑った。
「もう仏教的な話になってくるけどね、まぁ聞いてくれ」
毅はさらに続ける。
「その意識を強制的に虚構ではあるが、村へと戻す。そして3日間で何とかしてその賽の河原や三途の川にいる君たちの意識を、強制的に戻す必要があった。つまり」
良輔が引き取った。
「“その世界”の俺たちを……殺す必要があった」
「そういうことだ。だけれども、君たちは自分が死にかけていることを理解していない。そうなると、生き残っている人がその世界に入り込み、できる限り口外せず、意識を殺してこなければ……ならないというわけだ」
雄哉がブイサインをする。
「今回の場合、それは俺しかいなかったってわけ」
「未成年にそんな残酷なことをさせるのは私としても抵抗があったが、雄哉くんは君たちが助かるなら、と受けてくれた」
「ちょっと待ってください」
また良輔がストップをかける。
「仮に俺たちが全員“あっちの世界”で死んだとしたら……雄哉は、取り残されるじゃないですか」
「そう。それがネックなんだよ」
毅は表情を暗くする。
「君たちを救うために入った人物は……通常、犠牲になってしまう」
「……。」
「だから、私はいままでこの機械を使ったことはなかった。しかし、雄哉くんは自らを犠牲にしてでも、君たちを助ける。そう言ってくれたから……使ったんだ」
「でも……いま、雄哉は生きてる」
「腕の刻印、覚えてるか？」
雄哉が右腕をトントン、と軽く叩いた。

「あぁ……」
「あれは、お前らが死ぬか生きるかという……一人ひとりのタイムリミットを示してたんだ。それまでに何とかして意識を……現実世界へ戻す必要があった」
「そういうことだったのか……」
つまり、良輔の場合は亡くなる7秒前で意識が現実へと戻ったというわけである。
「そして、最後に亡くなる人物の意識が現実へ帰る、あるいは“あっちの世界”に引き込まれた場合は、機械を通じて意識の世界に入った人物も……戻れなくなる。つまり、どっちにしても犠牲になるってわけだ」
「でもお前、いま俺の目の前にいるじゃん」
「そ。良輔。お前が俺を先に撃ったからだよ」
「あ……！」

（逃……がす……か！）

あの瞬間の記憶が蘇る。
「お前に頭ぶち抜かれて……俺の“あっちの世界”での意識は強制的に現実に戻された。その直後、お前も“あっち”では死んだ」
「それで、幸いにして全員が助かったと言うわけだ」
「……。」
良輔の頭の中で、次々とあの3日間にあった出来事が蘇っていく。
「顔色の悪かった人は？」
「意識があの世に吸い込まれる……寸前だったってことだ」
「……じゃあ、死んだ順に」
「この世では息を吹き返したってわけだ」
「……。」
すべてを理解できた良輔は、フラフラと立ち上がりそのままゆっくりと、雄哉を抱き締めた。

「雄哉……」
「なんだよ良輔～」
「あ……りが……とう」
言葉にならない想いが、次々と良輔の胸からあふれ出していく。
こうして、良輔を巻き込んだ3日間の“事件”はゆっくりと、幕を下ろしたのだった。

７／３　１５：３０

「んー……」
良輔は病室のベッドで思い切り伸びをした。あれから何度かニュースを目にするが、今回の地震で既に３０００人以上が亡くなっているそうだ。
「俺たち……助かったんだよなぁ」
隣にいる美咲に声をかけた。美咲も左腕を骨折し、さらに頭部を強く打っていたそうだが、飯塚のおかげで意識を取り戻していた。
「そうだね……。なんか、私も夢見てた気分」
「夢だけど、夢じゃなかったんだな」
「そうだね。なんか、不思議」
美咲と良輔は見つめあいながら、フフッと笑った。
「おっ！」
ガチャ、と病室のドアが開いたと思うと雄哉が入ってきた。
「なんだよ～お二人さん！　いい感じなわけ？」
「バッ！　バカ！　そんなんじゃねーよ」
良輔が顔を真っ赤にする。
「あれぇ？　またまたぁそんなこと言っちゃって！」
雄哉がグイグイと良輔のわき腹をつついた。
「バァカ！　まだ痛ぇっつの！」
良輔も仕返しとばかりに雄哉のわきをこそばした。笑い声が病室から響き渡る。
「なぁ」
雄哉が不意に真剣な顔つきになった。
「何？」
「これから……お前ら、どうすんだ？」
「……。」

「村……なくなっちゃったじゃん」
地震による土砂災害で、西羽生村は建物どころか村のあった場所すべてが埋め尽くされてしまった。復旧や復興という次元を超えた被害である。
「私たち……みんな、離れ離れになるのかな」
美咲も寂しそうに呟く。
「俺ん家は、広島のばぁちゃん家行くことになってるらしい」
良輔が言った。
「マジかよ」
雄哉が落胆する。
「でもさ！」
良輔はガシッと美咲と雄哉の肩に腕を回した。
「俺らは、ずーっと一緒だ」
「……なんだよ、その臭いセリフ」
良輔は少し赤くなりつつも、返した。
「だって俺ら、1回死に掛けてるのに、またこうして会ってるじゃん」
「……。」
「だから」
良輔は満面の笑みでこう言った。
「どんだけ離れ離れになっても、俺たちずっと、一緒だ」
グッと胸に親指を押し付ける良輔。それを見た美咲と雄哉が、ニッコリ笑った。
「そうだな……」
雄哉がギュッと良輔の手を握り締める。
「みんな、生きてる」
美咲も二人の手を握り締めた。
「またいつか、絶対、会おうぜ」
「うん」
美咲の目から涙がこぼれ落ちた。

「おう」
雄哉も涙目になっている。
「そんなに泣くなって！　二人とも！」
良輔は二人の肩を叩きながら、笑った。
「良輔～」
摂子の声がする。
「ほら、二人とも涙拭かないと、母さん入ってくるぜ」
「うん……」
雄哉と美咲は涙を拭い、雄哉が病室を出て行く。
「良輔！」
雄哉が振り返った。
「ん？」
「またな！」
「……おう！」
雄哉が病室を出る姿を見送る。良輔と美咲はその後ろ姿をしばらく見つめることしかできなかった。
「……。」
本当に、夢のような出来事だった。良輔は負傷した自分の手をジッと見つめる。
「美咲」
「何？」
「俺……将来、研究者になろうかな」
「やだ。急にどうしたの？　良輔らしくもない」
美咲がクスクスと笑う。
「俺、真剣（マジ）だっつの！」
笑い声が響き渡る病室。二人はしきりに笑った後、再び良輔が真剣な面持ちで言った。
「さっきの、ホントだからな」
「そうなの？」
「おう」

良輔は無事だった手を握り締めた。
「飯塚先生みたいになって……どんな形でもいい。死と生の淵にいる人を……助けられるような、あんな先生になりたい」
「……怖い思いさせられたけどね」
「それ言っちゃあおしまいだろ！」
再び大笑いする二人。傾きかけた太陽が、土砂で埋まった西羽生村のほうも明るく照らし始めていた。
「良輔……」
どこからともなく、誰かから呼ばれた気がして、良輔はキョロキョロと辺りを見渡した。
「どうしたの？」
「いや……」
しかし、声は次第にハッキリと聞こえてきた。
「良輔」
「……！？」
突然だった。グラリと良輔の体が揺れ始めたのだ。
「よっ、余震！？」
転倒して頭を強く打ったのか、良輔はそのまま意識を失ってしまった。

「良輔！」
「！」
次に目を覚ますと、摂子がエプロン姿で目の前にいた。
「起きなさい！　何時だと思ってるの！？」
「え……えぇ？」
いつもの朝。
いつもの自分の部屋。
「夢……？」
「何寝ぼけてるの。学校に遅れるでしょ？　早く着替えて、下に降りてらっしゃい」

「う、うん……」
良輔は寝ぼけ眼を擦りながらパジャマ代わりに使っているシャツとズボンを脱ぎ捨て、制服に着替えた。
「よしっと！」
悪い夢を見ていたんだ。良輔はそう思いながら、着替えて部屋を飛び出そうとした。
「……！」
自分の部屋にかけてあるカレンダーに、目が留まった。
「7月……1日……」
なんとなく不安な気持ちが良輔の心を包み込む。
「いや……夢だったんだ」
良輔はブルブルと首を振り、下に降りてご飯を食べに向かった。
「行ってきます！」
朝食を終え、家を飛び出した良輔。腕時計は、午前7時４０分を指していた。
「おっはよー！　良輔！」
美咲が勢いよく手を振る。
「おはよ、美咲！　雄哉は？」
「今日はおつかいでちょっと遅れてくるって」
「そ、そうなんだ……」
記憶の断片にある。この瞬間、どこかで迎えたような……。
「良輔？」
「いや……なんでもない」
そう言って笑顔で応えた瞬間、だった。
地面が揺れた。
美咲が悲鳴を上げる。
（ウソだろ……！？）
すべては夢だったはずだ。そう思い、良輔は後ろを振り返った。
「……！」
土砂が、自分たち目がけて雪崩降りてきた。

（マジ……かよ）
また、あの3日間を繰り返せってか？
良輔は自虐的に笑った。
（また……会えるってわけか）
最後の最後で、良輔は美咲の上に覆いかぶさった。それは、前に同じ経験をしたときとは異なる行動だった。
（何度でも立ち向かってやる）
良輔は心に決めていた。何度でも立ち向かい、いつかきっと、本当に笑いあえる日を絶対に迎えてみせると。
土砂の音が響き渡る。
新たな3日間が、幕を開けた瞬間だった。

―　完　―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1274h/

３日間－The Dead Line－

2010年10月8日13時27分発行